

タイトル	エヴェンキ語の接尾辞における母音音素の形態音韻変化論
著者	朝克, D. O.
引用	北海学園大学人文論集, 21: 181-229
発行日	2002-03-31

エヴェンキ語の接尾辞における母音音素の 形態音韻変化論

D. O. 朝 克

はじめに

周知の通り、アルタイ諸言語の文法に関わることは、すべて様々な膠着的な接尾辞によって表示される。アルタイ諸言語において、文法関係が最も複雑であるエヴェンキ語は殆どすべてそれぞれ文法上の意味内包を担った膠着的な接尾辞を巧妙に利用して、日常用語の語間に現れる極めて複雑でかつ煩瑣な接触関係を一つ一つ非常に精確に標示し、合理的かつ理想的に解決している。

エヴェンキ語の接尾辞を、形態音韻論の立場から、全体的かつ系統的に観察し分析すると、それらは文法構造の形式と内容の面で、とりわけ文法形態論上の記述手段と表現方法等において、絶対に欠くことのできない非常に重要な構成要素である。また、エヴェンキ語の接尾辞は、特別に設定された抽象的な単位として、名詞、代名詞、形容詞、数詞、動詞及び副詞などの語幹の後に付加され、名詞類関係の複数形態や格形態、人称形態、級形態及び動詞関係の態形態や相形態、直説法形態、願望法形態、命令法形態、仮定法形態、副動詞形態、形動詞形態、助動詞形態等に関する豊富でかつ厳密な文法上の意味内包を精細でかつ完璧に標示している。

エヴェンキ語における接尾辞の中にも、派生接尾辞のように形態音韻論における音韻変化現象が存在し、またそれらの間にはかなり細緻でかつ明晰な相違と区別がある。例えば、名詞類に関しては数形態や人称形態、格形態、級形態等、動詞についても態形態や相形態、式形態、法形態、時形態、副動詞形態、形動詞形態、助動詞形態等、極めて煩雑な文法の形態構

造の形式と内容がある。これらの文法形態論のカテゴリーに含まる形態変化の内容はすべて音韻変化の形式で表現される。しかも、これらの文法上の意味内包を担った音韻変化の表現形式は、音韻構造システムにおける音素の組合せの基本的な原理を厳守し、様々な形態音韻変化の現象を発生させ、特別に設定された極めて抽象的な音韻構造形式として表示される。

エヴェンキ語において、形態音韻変化の現象を持つ接尾辞は、この言語の接尾辞全体の56パーセントを占める。また、これらの接尾辞は、前置する語幹の音韻構造の性質と特徴及び母音調和規則によって、形態音韻変化の現象を発生させるが、その種類は、形態音韻変化の派生接尾辞のように7種類に分類されるような実例は全く見付けられなかった。接尾辞における形態音韻変化の現象は、派生接尾辞と比べると遥かに複雑である。すなわち、接尾辞の形態音韻変化の現象は、単一母音音素で構成された実例がある一方で、また7つの音素で組み合わせられたものも存在する。

ここでは、接尾辞の母音音素の形態音韻変化現象に基づいて、分類した音韻構造の形式と内容を系統的かつ全体的に分析する。

可変短母音音素/a/, /ə/, /o/, /θ/, /u/, /ʉ/ ; /a/, /ə/, /o/, /θ/ ~ /a/, /ə/ ; /o/, /θ/及び可変長母音音素/aa/, /əə/, /oo/, /θθ/ ; /uu/, /ʉʉ/等の形態音韻変化を持つ接尾辞が語幹の後に付加される時、音素間の組合せの条件と母音調和の規則は形態音韻変化の派生接尾辞の場合と全く同じである。すなわち、短母音/a/, /o/, /u/と長母音/aa/, /oo/, /uu/を中心に構成された接尾辞は基本的に短母音/a/, /o/, /u/及び長母音/aa/, /oo/, /uu/で組み合わせられた語幹の後に、短母音/ə/, /θ/, /ʉ/及び長母音/əə/, /θθ/, /ʉʉ/を主にして構成された接尾辞は必ず短母音/ə/, /θ/, /ʉ/及び長母音/əə/, /θθ/, /ʉʉ/で組み合わせられた語幹の後に用いられる等の厳密な規則や基本的な原理が存在するのは形態音韻変化の派生接尾辞の場合と全く同じである。従って、可変母音音素を中心に構成された形態音韻変化の接尾辞を論述する場合、接尾辞がどのような母音音素で構成され、またどのような母音音素を持つ語幹の後に付加されるか等について詳細を再び記述すると、論文は無意味に長くなる恐れがあるので、以下の節ではこの問

題に関する記述をすべて省略する。もし形態音韻変化の接尾辞における音素の組合せについて興味関心があるか、または理解し難い場合があれば、形態音韻変化の派生接尾辞について詳細かつ明晰に論じた実例を参考にさせていただきたい。また、派生接尾辞の形態音韻変化現象を論述する時に全く言及しなかった形態音韻変化現象が接尾辞の実例に現れる場合、それを詳論する必要があるので、音素の組合せの形式と内容も合わせて全体的に記述する。

一、接尾辞の母音を中心にした形態音素の組合せ

エヴェンキ語の形態音韻変化の接尾辞では、母音音素が極めて活発に機能し、形態音韻論の音韻変化における最も重要な要素である。従って、形態音韻変化を持つ接尾辞は、単一母音音素で構成されたもの以外は、すべて一律に母音音素を中心にして構成されている。また、母音の形態音韻変化の現象を中心に構成された接尾辞は、基本的に異なる音素の組合せで構成される。すなわち、ある接尾辞は単一の子音音素で、ある接尾辞は単一の母音音素と幾つかの子音音素、あるいは幾つかの母音音素と幾つかの子音音素が組み合わされて構成される。そのうち、単一の母音音素と二つの子音音素で組合せられた接尾辞が最も多い。エヴェンキ語において、母音音素と子音音素が組み合わされ構成された接尾辞の内容について、全体的かつ客観的に分析し、分類すると、次の8つにまとめることが可能である。

(一)、単一母音音素の組合せ

エヴェンキ語の文法上の意味内包を担った接尾辞には、母音音素の形態音韻変化の現象を基準にして峻別された実例を分析すると、単一の母音音素で構成されたものが存在する。また、この母音音素の形態音韻変化の現象によって、幾つかの特有の母音音素で構成された接尾辞に変わる実例がある。エヴェンキ語において、単一の母音音素で構成された形態音韻変化現象は、非常に珍しくて特殊であり、極めて限られた範囲で用いられてい

る。具体的に述べると、この項目に含まれるのは、体言形態の格形態カテゴリーにおける非確定対格の接尾辞/a/, /ə/, /o/, /θ/, /u/, /ʉ/しかない。

また、これらの形態音韻変化の接尾辞は、子音/ŋ/, /n/, /m/, /p/, /t/, /k/, /tʃ/で終止した名詞類の後にのみ付加されるという厳密な規則がある。例えば、

aaɾatʃ 「チーズ」 + -a ⇒ aaɾatʃa 「チーズなんかを」

əhiŋ 「姉」 + -ə ⇒ əhiŋə 「姉なんかを」

dʒottok 「窪」 + -o ⇒ dʒottoko 「窪なんかを」

θəm 「鎖骨」 + -θ ⇒ θəmθ 「鎖骨なんかを」

uduŋ 「雨」 + -u ⇒ uduŋu 「雨なんかを」

sʉt 「全部」 + -ʉ ⇒ sʉtʉ 「全部なんかを」

これらの実例のように、形態音韻変化を持つ非確定対格の接尾辞/a/, /ə/, /o/, /θ/, /u/, /ʉ/は、音素の組合せに関する原理と母音調和の規則に従い、短母音/a/, /ə/, /o/, /θ/, /u/, /ʉ/, または長母音/aa/, /əə/, /oo/, /θθ/, /uu/, /ʉʉ/を中心に構成された名詞類の語幹の後に付加される。なお、非確定対格の接尾辞/a/, /ə/, /o/, /θ/, /u/, /ʉ/以外の実例は全く発見できなかった。従って、この項目に属する形態音韻変化の接尾辞は、格形態の非確定対格にしか使用されないのである。また、この項目に属する形態音韻変化が形態音韻論において果たす機能はかなり弱い。

(二)、単一の母音音素と単一の子音音素の組合せ

エヴェンキ語において、単一の母音音素と単一の子音音素が組み合わさられて構成される接尾辞は、名詞類の格形態と動詞の態形態や相形態、直説法形態のカテゴリーに主として現れる。また、これらの形態音韻変化の接尾辞はすべて、子音音素が前置し、母音音素が後置している。この項目に属する接尾辞は9つあり、次のように分類することができる。

A 格形態における確定対格の/ba/, /bə/, /bo/, /bθ/, /bu/, /bʉ/, 非確定対格の/ya/, /yə/, /yo/, /yθ/, /yu/, /yʉ/, 位格の/la/, /lə/, /lo/, /lθ/, /lu/, /lʉ/, 与格の/du/, /dʉ/の4つの形態音韻変化現象を持つ接尾辞があ

る。

例えば, /du/, /dʉ/ (与格の接尾辞)

ahiq 「兄」 + -du ⇒ ahiqu 「兄に」

əhiq 「姉」 + -dʉ ⇒ əhiqdʉ 「姉に」

格形態に現れる単一の母音音素と単一の子音音素で構成される形態音韻変化の接尾辞は、短母音/a/, /ə/, /o/, /ø/, /u/, /ʉ/及び/u/, /ʉ/の音韻変化現象と不変的な子音/b/, /w/, /y/, /l/が組み合わされて構成される。そのうち、短母音/a/, /ə/, /o/, /ø/, /u/, /ʉ/の音韻変化は、形態音韻論において比較的大きな役割を果たしている。

B 動詞の態形態において被動態の/wu/, /wʉ/の形態音韻変化現象を持つ接尾辞がある。例えば、

monda-「打つ」 + -wu ⇒ mondawu-「打たれる」

əddə-「壊す」 + -wʉ ⇒ əddəwʉ-「壊される」

エヴェンキ語の動詞の態形態において、形態音韻変化を持つ接尾辞は実例に挙げた/wu/, /wʉ/しかない。これらは短母音/u/, /ʉ/及び子音/w/の組合せで構成されている。

C 動詞の相形態において、執行相の/na/, /nə/, /no/, /nø/の形態音韻変化を持つ接尾辞がある。例えば、

gada-「取る」 + -na ⇒ gadana-「取りに行く」

ədə-「迎える」 + -nə ⇒ ədənə-「迎えに行く」

boho-「追う」 + -no ⇒ bohono-「追っていく」

gəso-「誘拐する」 + -nø ⇒ gəsønø-「誘拐に行く」

これらの実例に見られるように、形態音韻変化の条件を備えた接尾辞は動詞の態形態の中では執行相だけである。また、この音韻変化現象は可変短母音/a/, /ə/, /o/, /ø/と不変子音/n/の組合せで構成される。

D 動詞の直説法形態における単数一人称過去形の/su/, /sʉ/及び単数・複数三人称の/sa/, /sə/, /so/, /sø/の形態音韻変化現象を持つ接尾辞がある。

例えば, /su/, /sʉ/ (単数一人称過去形の接尾辞)

adda-「喜ぶ」 + -su ⇒ addasu 「私は喜んだ」

əddə-「壊す」 + -sʉ ⇒ əddəsʉ 「私は壊した」

直説法形態のカテゴリーにおける単数・複数三人称過去形の接尾辞も全く同じで、短母音/a/, /ə/, /o/, /θ/と子音/s/の組合せで構成される。また、一人称過去形の接尾辞も短母音/u/, /ʉ/が子音/s/と組み合わせられて発生したものである。すなわち、直説法で単一の母音音素と単一の子音音素が組み合わせられた接尾辞はすべて過去形であり、主として短母音/a/, /ə/, /o/, /θ/, /u/, /ʉ/と子音/s/の組合せで構成されている。勿論、直説法の過去形の形態について、音韻変化が一定の役割を發揮している。

つまり、この項目に属する実例は主として名詞類の格形態のカテゴリーに、次に動詞の直説法過去形形態、態形態、相形態に現れる。また、これら接尾辞は殆どすべて短母音/a/, /ə/, /o/, /θ/, /u/, /ʉ/及び短母音/a/, /ə/, /o/, /θ/あるいは短母音/u/, /ʉ/の音韻変化現象を中心に不変な子音/w/, /b/, /y/, /s/, /l/, /n/, /d/が巧妙かつ合理的に組み合わせられて構成されている。勿論、単一の母音音素と単一の子音音素で組み合わせられた形態音韻変化の接尾辞は、名詞類の格形態と動詞の直説法形態に主として使用され、形態音韻論における音韻変化の機能をかなり發揮している。

(三)、一つの母音音素と二つの子音音素の組合せ

この項目に属する形態音韻変化の接尾辞は、名詞類の複数形態や格形態、人称形態、級形態及び動詞の態形態や相形態、直説法形態、命令法形態、副動詞形態など広く、最もよく用いられている。また、これら一つの母音音素と二つの子音音素で組み合わせられる接尾辞は、CVCまたはCCVという二つの音韻構造の形式を持ち、16の実例がある。

(1) CCV に属するのは、一つしかない。

副動詞形態における併進式の/ddu/, /ddʉ/という形態音韻変化現象を持つ接尾辞である。例えば、

ana-「押す」 + -ddu ⇒ anaddu 「押すと同時に」

əwə-「下りる」 + -ddʉ ⇒ əwəddʉ 「下りると同時に」

形態音韻変化の接尾辞において、CCV の形式を持つ形態音韻変化の実例は非常に少数で、上に挙げた併進複動詞の/ddu/, /ddʉ/以外にはない。また、これらの接尾辞は、可変短母音音素/u/, /ʉ/及び不変な二重の子音音素/dd/の組合せで構成されている。

(2) CVC の形式を持つものは、次の 14 の接尾辞である。

A 名詞類の複数形態の/sal/, /səl/, /sol/, /səl/, /sul/, /sʉl/及び/nar/, /nər/, /nor/, /nər/

例えば, ahij 「兄」 + -nar ⇒ ahignar 「兄達」

əhij 「姉」 + -nər ⇒ əhignər 「姉達」

ooʃe 「義兄」+ -nor ⇒ ooʃenor 「義兄」

gʉtʃʉ 「友達」+ -nər ⇒ gʉtʃʉnər 「友達たち」

これら接尾辞はすべて、可変短母音音素/a/, /ə/, /θ/, /o/, /ʉ/, /u/, あるいは可変短母音音素/a/, /ə/, /θ/, /o/の音韻変化現象を基準にし、不変子音音素の/s/, /l/及び/n/, /r/と組み合わせられて構成されている。これらの使用頻度が非常に高い接尾辞は、複数形態のカテゴリーにおいてかなり大きな役割を發揮している。

B 名詞類の格形態における限定格の/həŋ/, /həŋ/, /hoŋ/, /həŋ/

例えば, hahara 「鶏」 + -həŋ ⇒ haharahəŋ 「鶏だけ」

hehə 「猫」 + -həŋ ⇒ həhəhəŋ 「猫だけ」

orootto 「草」 + -hoŋ ⇒ oroottohoŋ 「草だけ」

ʉr 「山」 + -həŋ ⇒ ʉrhəŋ 「山だけ」

格形態では、この分野に属する実例はここに挙げた限定格しかない。また、これらの接尾辞は母音音素/a/, /ə/, /o/, /θ/と子音音素/h/, /ŋ/の組合せで構成される。

C 名詞類の人称形態における所属人称が一人称複数の/muŋ/, /mʉŋ/及び二人称複数の/suŋ/, /sʉŋ/

例えば, orootto 「草」 + -muŋ ⇒ oroottomuŋ 「私達の草」

ʉnʉgʉŋ 「乳牛」 + -mʉŋ ⇒ ʉnʉgʉŋmʉŋ 「私達の乳牛」

人称形態において形態音韻変化現象を持つ実例は、主として複数を標示

した接尾辞に使用されたものである。また、これら実例はすべて短母音/u/, /ʉ/と子音/m/, /s/, /ŋ/の組合せで構成され、所属人称形態に対して、形態音韻論における音韻変化の機能を比較的果たしている。

D 名詞類の級形態における比較一級の/həŋ/, /həŋ/, /hoŋ/, /həŋ/

例えば, aya「好い」 + -həŋ ⇒ ayahəŋ「少しよい」

əru「悪い」 + -həŋ ⇒ əruhəŋ「少し悪い」

nonnom「長い」 + -hoŋ ⇒ nonomhon「少し長い」

buggu「太い」 + -həŋ ⇒ bugguhəŋ「少し太い」

ここに現れるのは、級形態の比較一級だけである。また、これらの接尾辞は短母音/a/, /ə/, /o/, /θ/及び子音/h/, /k/, /ŋ/の組合せで構成されている。

E 動詞の態形態における使動態の/həŋ/, /həŋ/, /hoŋ/, /həŋ/

例えば, gaha-「取る」 + -həŋ ⇒ gahahəŋ-「取らせる」

əddə-「壊す」 + -həŋ ⇒ əddəhəŋ-「壊させる」

oo-「する」 + -hoŋ ⇒ oohəŋ-「させる」

buu-「あげる」 + -həŋ ⇒ buuhəŋ-「あげさせる」

態形態でここに属する接尾辞は、使動態の/həŋ/, /həŋ/, /hoŋ/, /həŋ/である。また、この接尾辞は短母音/a/, /ə/, /o/, /θ/と子音/h/, /ŋ/の組合せで構成されている。

F 動詞の相形態における存続相の/taal/, /təəl/, /tool/, /təəl/, 多回相の/mal/, /məəl/, /mol/, /məəl/, 反復相の/guutʃ/, /gʉutʃ/, 固定相の/taŋ/, /təŋ/, /toŋ/, /təŋ/, /tuŋ/, /tʉŋ/

例えば, /guutʃ/, /gʉutʃ/ (反復相接尾辞)

dʒoono-「懐かしむ」 + -guutʃ ⇒ dʒoonoguutʃ「繰り返し懐かしむ」

əddə-「壊す」 + -gʉutʃ ⇒ əddəgʉutʃ「繰り返し壊す」

この項目に属する形態音韻変化現象は、相形態において、かなり広い場面で使用され、相当大きな役割を發揮している。また、これらの接尾辞は殆どすべて短母音/a/, /ə/, /o/, /θ/及び/a/, /ə/, /θ/, /o/, /u/, /ʉ/あるいは

は長母音/uu/, /uʉ/と/aa/, /əə/, /oo/, /θθ/の音韻変化を中心に, 不変子音/t/, /l/, /m/, /ŋ/, /g/, /tʃ/と組み合わせられて構成されている。

G 動詞の直説法形態における単数及び複数三人称の現在形・未来形の/raŋ/, /rəŋ/, /roŋ/, /røŋ/及び複数一人称の/muŋ/, /mʉŋ/

例えば, raŋ/, /rəŋ/, /roŋ/, /røŋ/ (直説法の単数三人称の現在形・将来形の接尾辞)

ana-「押す」 + -raŋ ⇒ anaraŋ「(彼は)現在または将来押す」

əwə-「下りる」 + -rəŋ ⇒ əwərəŋ「(彼は)現在または将来下ろす」

ugu-「乗る」 + -roŋ ⇒ uguroŋ「(彼は)現在または将来乗る」

buu-「与える」 + -røŋ ⇒ buuruŋ「(彼は)現在または将来与える」

動詞直説法形態に現れたこれら一つ母音音素と二つ子音音素が組み合わせられた接尾辞は, 主として短母音/a/, /ə/, /o/, /θ/及び/u/, /uʉ/の音韻変化現象と子音音素/r/, /d/, /n/, /m/, /ŋ/との組合せで構成される。また, これらの接尾辞は, 具体的な言葉の中で, 非常に使用頻度が高く, 形態音韻論における音韻変化の機能と作用を極めて理想的に果たしている。

H 命令法形態における単数一人称の/gar/, /gər/, /gor/, /gər/

例えば, ana-「押す」 + -gar = anagar「私は押せ」

əwə-「下りる」 + -gər = əwəgər「私は下りれ」

ugu-「乗る」 + -gor = ugugor「私は乗れ」

buu-「与える」 + -gər = buugər「私は与え」

命令法の複数一人称の接尾辞も, 単数一人称の場合と全く同じ/gar/, /gər/, /gor/, /gər/を使用する。すなわち, 命令法の単数及び複数一人称の接尾辞はすべて/gar/, /gər/, /gor/, /gər/で標示される。また, この項目に含まれる接尾辞は短母音/a/, /ə/, /o/, /θ/及び子音/g/, /r/の組合せで構成される。これら接尾辞は, 一人称の命令法の意味内包を示すことにおいて

形態音韻論の面でかなり大きな機能を果たしている。

概括すると、一つの母音音素と二つの子音音素で組み合わせられた接尾辞は、ここで実例を挙げて論述した通り、非常に豊富でかつ複雑である。これらの接尾辞は、すべてCVCとCCVの音韻構造の形式を持つが、CVC形式で構成された接尾辞は15あるが、CCVのものは一つしかない。

また、これらの接尾辞はすべて短母音/u/, /ʌ/~/a/, /ə/, /o/, /θ/~/a/, /ə/, /o/, /θ/, /u/, /ʌ/, あるいは長母音/uu/, /ʌʌ/~/aa/, /əə/, /oo/, /θθ/の音韻変化現象を中心に組み合わせられて構成される。そのうち、短母音/a/, /ə/, /o/, /θ/を主にして構成された実例が8個あり、この項目に属する接尾辞全体の半分を占め、形態音韻論の面から見て、かなり大きな役割を果たしている。次は、短母音/u/, /ʌ/の音韻変化を基準にして構成された接尾辞であり、4つの実例がある。しかし、短母音/a/, /ə/, /o/, /θ/, /u/, /ʌ/や長母音/aa/, /əə/, /oo/, /θθ/, または長母音/uu/, /ʌʌ/の形態音韻変化の現象が組み合わせられた実例は、一つか二つしか出現しない。

この項目に属する形態音韻変化の接尾辞は、①動詞の相形態の分野に一番多く用いられ、この接尾辞の実例全体の25パーセントを占める。②次は、動詞の直説法における接尾辞で、18パーセント。③三番目は、動詞の命令法及び名詞類の複数形態や人称形態の中に使用され、各々13パーセント。④最後は、動詞の態形態及び名詞類の格形態や、副動詞形態などの分野に用いられた形態音韻変化の接尾辞であり、この項目に含まれる接尾辞全体の18パーセントを占めている。これら事実から、エヴェンキ語における一つの母音音素と二つの子音音素で組み合わせられた形態音韻変化の接尾辞は、動詞の相形態と直説法形態、名詞類の複数形態などの分野で一番多く使用され、形態音韻論における音韻変化の機能と作用をかなり理想的に発揮していることが理解される。

(四)、一つの母音音素と三つの子音音素の組合せ

エヴェンキ語において、一つの母音音素と三つの子音音素が組み合わせられた形態音韻変化の接尾辞は、すべてCCVCの音韻構造の形式を持ってい

る。しかし、この項目に属する接尾辞はかなり少数で、次に挙げる2つの実例しかない。

A 動詞の直説法形態における複数二人称の現在形・未来形の /tʃtʃuŋ/, /tʃtʃuŋ/

例えば, ana-「押す」 + -tʃtʃuŋ ⇒ anatʃtʃuŋ 「(あなた達) 現在または将来押す」

ɬli-「行く」 + -tʃtʃuŋ ⇒ ɬlitʃtʃuŋ 「(あなた達) 現在または将来行く」

B 名詞類の級形態における最高級を標示する /ggaŋ/, /ggəŋ/, /ggoŋ/, /ggoŋ/

例えば, datʃtʃi 「狭い」 + -ggaŋ ⇒ datʃtʃiggaŋ 「非常に狭い」

nəmi 「薄い」 + -ggəŋ ⇒ nəmiggaŋ 「非常に薄い」

goro 「遠い」 + -ggoŋ ⇒ goroggoŋ 「非常に遠い」

həhə 「青い」 + -ggoŋ ⇒ həhəggoŋ 「非常に青い」

以上の実例のように、一つの母音音素と三つの子音音素が組み合わされた接尾辞は、エヴェンキ語において極めて少数である。これら接尾辞は、短母音 /u/, /ɤ/, あるいは短母音 /a/, /ə/, /o/, /θ/ と二重子音 /gg/, /tʃtʃ/ または子音 /ŋ/ の組合せで構成されている。

(五)、二つの母音音素と二つの子音音素の組合せ

この項目に現れる形態音韻変化現象を持つ接尾辞は、CVCV の音韻構造の形式で構成され、エヴェンキ語における使用頻度もかなり高い。また、これらの接尾辞は、名詞類の格形態、級形態及び動詞の願望法形態、直説法形態、相形態、副動詞形態のカテゴリーの中で主として用いられ、実例が9つある。

A 名詞類の格形態における非定位格の /duli/, /dɬli/, 位格の /dala/, /dələ/, /dolo/, /dələ/

例えば, /dala/, /dələ/, /dolo/, /dələ/ (位格の接尾辞)

ada 「姉」 + -dala ⇒ adadala 「姉に」

dəl「小屋」 + -dələ ⇒ dəldələ「小屋に」

doo「川」 + -dolo ⇒ doodolo「川に」

dʒuu「山」 + -dələ ⇒ dʒuudələ「山に」

二つの母音音素と二つの子音音素の組合せで構成された接尾辞は、格形態において割合積極的な機能を果たしている。また、これら接尾辞は、すべて短母音音素/uu/あるいは短母音音素/a/, /ə/, /o/, /θ/の形態音韻変化現象を中心に、子音音素/d/, /l/と組み合わせられて構成されている。

B 名詞類の級形態における比較二級の/sala/, /sələ/, /solo/, /sələ/

例えば, aya「好い」 + -sala ⇒ ayasala「少しだけ好い」

əru「悪い」 + -sələ ⇒ ərusələ「少しだけ悪い」

goro「遠い」 + -solo ⇒ gorosolo「少しだけ遠い」

həhə「青い」 + -sələ ⇒ həhəsələ「少しだけ青い」

比較二級に使用された形態音韻変化の接尾辞が短母音/a/, /ə/, /o/, /θ/と子音/s/, /l/の組合せで構成されていることは言うまでもない。

C 動詞の願望法における単数一人称の/gare/, /gəre/, /gore/, /gøre/と単数及び複数三人称の/gane/, /gəne/, /gone/, /gəne/

例えば, /gare/, /gəre/, /gore/, /gøre/ (願望法の単数一人称の接尾辞)

ga-「取る」 + -gare ⇒ gagare「(私は)取りましょう」

əwə-「下りる」 + -gəre ⇒ əwəgəre「(私は)下りましょう」

oo-「やる」 + -gore ⇒ oogore「(私は)やりましょう」

ələhəji-「騙す」 + -gəne ⇒ ələhəjigəne「(私は)騙しましょう」

この項目に属する願望法の形態音韻変化の接尾辞は、すべて可変母音音素/a/, /ə/, /o/, /θ/と不変子音音素/g/, /r/, /n/及び不変短母音音素/e/の組合せで構成されている。また、これらの二つの母音音素と二つの子音音素が組み合わせられた接尾辞は、願望法の文法上の意味内包を妥当かつ明確に標示することにおいて比較的重要な役割を發揮している。

D 動詞の直説法における単数二人称過去形の/saʃi/, /səʃi/, /soʃi/, /

səʃi/

例えば, ana-「押す」 + -saʃi ⇒ anasaʃi 「(あなたは) 押した」

əwə-「下りる」 + -səʃi ⇒ əwəsəʃi 「(あなたは) 下りた」

ommo-「忘れる」 + -soʃi ⇒ ommosoʃi 「(あなたは) 忘れた」

gəse-「誘拐する」+ -səʃi ⇒ gəsəsəʃi 「(あなたは) 誘拐された」

直説法の過去形に現れる形態音韻変化現象を持つ接尾辞は, 可変短母音/a/, /ə/, /o/, /θ/と不変子音/s/, /ʃ/及び不変短母音/i/の組合せで構成される。

E 動詞の相形態における進行相の/dʒisa/, /dʒisə/, /dʒiso/, /dʒisə/

例えば, dʒawa-「掴む」 + -dʒisa ⇒ dʒawadʒisa 「掴んでいる」

təgə-「座る」 + -dʒisə ⇒ təgədʒisə 「座っている」

soŋo-「泣く」 + -dʒiso ⇒ soŋodʒiso 「泣いている」

dʒugu-「運ぶ」 + -dʒisə ⇒ dʒugudʒisə 「運んでいる」

進行相に現れる接尾辞は, 短母音/a/, /ə/, /o/, /θ/の音韻変化を中心に不変子音/dʒ/, /s/及び不変短母音/i/が組み合わされて構成されている。

F 副動詞の条件副動詞に使用される接尾辞/sala/, /sələ/, /solo/, /sələ/例えば, ga-「取る」 + -sala ⇒ gasala 「取ると」

təgə-「座る」 + -sələ ⇒ təgəsələ 「座ると」

ommo-「忘れる」+ -solo ⇒ ommosolo 「忘れると」

buu-「与える」+ -sələ ⇒ buusələ 「与えると」

副動詞に属する形態音韻変化現象を持つ接尾辞は, 以上の例に限られる。また, これらの接尾辞は, 短母音/a/, /ə/, /o/, /θ/と子音/s/, /l/の組合せで構成されている。

要すると, エヴェンキ語において, 二つの母音音素と二つの子音音素が組み合わされて構成された態音韻変化の接尾辞は, 上述の通り一定程度に存在する。また, すべて CVCV の音韻構造形式を持っている。そのうち, 動詞形態に関する実例は 6 つ, 名詞類に関する実例は 3 つある。合わせて

9つの実例がある。とりわけ、動詞の願望法と名詞類の格形態の分野に現れる実例が割合に多く、形態音韻論上でかなり大きな機能を果たしている。そのほかに、動詞の相形態、直説法形態、副動詞形態、また名詞類の級形態などの分野にも、この項目に属する形態音韻変化の接尾辞が用いられるが、実例はそれぞれ1つしか見付からない。

また、この項目に属する接尾辞は、殆どすべて可変的な短母音音素/a/, /ə/または/u/, /u/あるいは/a/, /ə/, /o/, /θ/の形態音韻変化現象を中心に不変的な子音音素/s/, /l/, /d/, /n/, /r/, /g/, /dʒ/, /ʃ/及び中性短母音音素/i/, /e/との組合せで構成される。そのうち、短母音/a/, /ə/, /o/, /θ/の形態音韻変化の現象を主にして構成された接尾辞が一番多く、78パーセントを占める。しかし、短母音/a/, /ə/または/u/, /u/の形態音韻変化現象を中心に組み合わされた接尾辞の実例はそれぞれ一つしかない。このことは短母音/a/, /ə/, /o/, /θ/の形態音韻変化の現象が、この項目に含まれる実例において形態音韻論上で最も大きな機能を発揮していることを示している。また、これらの接尾辞の中には、/saʃi/, /səʃi/, /soʃi/, /soʃi/ (直説法単数三人称の過去形の接尾辞), /gare/, /gəre/, /gore/, /gøre/ (願望法単数三人称の接尾辞), /duli/, /dʌli/ (非定位格の接尾辞) 等のように、前の音節に位置する短母音が形態音韻変化をした実例が、また/dʒisa/, /dʒisə/ (進行相の接尾辞) のように、後の音節に位置する短母音が形態音韻変化を起した実例もある。更に、/sala/, /sələ/, /solo/, /sələ/ (条件副動詞の接尾辞), /dala/, /dələ/, /dolo/, /dəlo/ (位格の接尾辞) のように、前後の両音節の短母音が同時に形態音韻変化をした実例も存在する。前置する音節の短母音の形態音韻変化現象を持つ接尾辞が一番多く、次に多いのは前後両音節の短母音が同時に形態音韻変化をした実例で、後置する音節の短母音のものは一つしかない。言うまでもなく、この事実はエヴェンキ語の二つの母音音素と二つの子音音素で組み合わされた接尾辞が前置する音節の短母音音素または前後両音節の短母音音素の形態音韻変化により構成されるものが絶対多数であることを示している。

(六)、二つの母音音素と三つの子音音素の組合せ

この項目に属する形態音韻変化の接尾辞は、動詞の直説法形態、副動詞形態及び名詞類の格形態、人称形態、級形態のカテゴリーでは一定数存在する。また、それらは基本的に CVCVC, CCVCV の二つの音韻構造形式を持っている。CVCVC の接尾辞の実例は、CCVCV のものより遥かに多いとは言え、この項目に現れる接尾辞は 9 つである。

(1) 項目 CCVCV に含まれる実例は一つしかない。

名詞類の格形態における方向格の /thahi/, /thəhi/, /thohi/, /thəhi/ の形態音韻変化の接尾辞である。

例えば、ada 「姉」 + -thahi ⇒ adathahi 「姉へ」
 əggidə 「下」 + -thəhi ⇒ əggidəthəhi 「下へ」
 doo 「川」 + -thohi ⇒ doothohi 「川へ」
 dʒʉʉ 「部屋」 + -thəhi ⇒ dʒʉʉthəhi 「部屋へ」

方向格の接尾辞は、可変短母音音素 /a/, /ə/, /o/, /θ/ を中心に、不変子音音素 /t/, /h/ 及び中性短母音音素 /i/ の組合せで構成される。

(2) CVCVC の接尾辞は、一般に動詞の直説法形態、副動詞形態、または名詞類の人称形態、級形態のカテゴリーで具体的に用いられる。

A 動詞の直説法形態における単数及び複数三人称の現在形の /dʒiraŋ/, /dʒirəŋ/, 複数一人称の現在形の /dʒimuŋ/, /dʒiməŋ/, 複数一人称の /samuŋ/, /səməŋ/, /somuŋ/, /səməŋ/, 複数二人称の現在形・未来形の /sasuŋ/, /səsəŋ/, /sosuŋ/, /səsəŋ/

例えば、/dʒiraŋ/, /dʒirəŋ/ (単数三人称の現在形の接尾辞)

ana-「押す」 + -dʒiraŋ ⇒ anadʒiraŋ 「(彼は今) 押している」
 əmə-「来る」 + -dʒirəŋ ⇒ əmədʒirəŋ 「(彼は今) 来ている」

これらの直説法に関わる形態音韻変化の接尾辞は、すべて短母音 /a/, /ə/ または /u/, /ʉ/ あるいは /a/, /ə/, /o/, /θ/ の音韻変化現象を基準にして構成される。そのうち、複数一人称の現在形・未来形の接尾辞 /samuŋ/, /

səmɯŋ/, /somɯŋ/, /səmɯŋ/と複数二人称の接尾辞/sasɯŋ/, /səsɯŋ/, /sosɯŋ/, /søsɯŋ/は、全く同じ短母音音素の音韻変化現象で構成される。すなわち、この二つの接尾辞が前置する音節に短母音/a/, /ə/, /o/, /θ/の形態音韻変化が発生する同時に、後置する音節に短母音/u/, /ɯ/の形態音韻変化が生じる。とすることは、これらの接尾辞の中に二重短母音の形態音韻変化現象が存在するということである。また、単数及び複数三人称の現在形の接尾辞/dʒirəŋ/, /dʒirəŋ/及び複数一人称の現在形の接尾辞/dʒimɯŋ/, /dʒimɯŋ/はすべて後置する音節の短母音/a/, /ə/または/u/, /ɯ/の音韻変化現象を基準にして構成される。これらの接尾辞において子音音素の/s/, /m/, /ŋ/, /dʒ/, /r/及び中性短母音音素の/i/などは不変的な構成要素として使用されている。つまり、動詞の直説法形態に存在する形態音韻変化の現象は、形態音韻論の面から見て、かなり大きな役割を果たしている。

B 順次副動詞の接尾辞/laahiŋ/, /ləəhiŋ/, /loohiŋ/, /ləəhiŋ/

例えば, awa-「拭く」 + -laahiŋ ⇒ awalaahiŋ 「拭いた後」

əwə-「下りる」+ -ləəhiŋ ⇒ əwələəhiŋ 「下りた後」

ugu-「乗る」 + -loohiŋ ⇒ uguloohiŋ 「乗った後」

yɯɯ-「出る」 + -ləəhiŋ ⇒ yɯɯləəhiŋ 「出た後」

言うまでもなく、以上の実例に現れた形態音韻変化の接尾辞は、長母音音素/aa/, /əə/, /oo/, /θθ/の音韻変化現象を中心に、子音音素の/l/, /h/, /ŋ/及び中性短母音音素/i/の組合せで構成される。

C 名詞類の人称形態における再帰複数人称の/niwal/, /niwəl/の接尾辞

例えば, amiŋ 「父」 + -niwal ⇒ amigniwal 「我々は自分の父」

əniŋ 「母」 + -niwəl ⇒ əniŋniwəl 「我々は自分の母」

再帰複数人称の形態音韻変化現象を持つ接尾辞は、可変短母音音素/a/, /ə/と不変子音音素/ŋ/, /w/, /l/及び中性短母音/i/の組合せで構成される。

D 名詞類の級形態における比較三級の接尾辞/hahaŋ/, /həhəŋ/, /hohəŋ/, /həhəŋ/

例えば, aya「好い」 + -hahaŋ ⇒ ayahahaŋ「ほんの少しだけよい」
 əɾɯ「悪い」 + -həhəŋ ⇒ əɾɯhəhəŋ「ほんの少しだけ悪い」
 oyo「賢い」 + -hohəŋ ⇒ oyohohəŋ「ほんの少しだけ賢い」
 buɣɯ「太い」 + -həhəŋ ⇒ buɣɯhəhəŋ「ほんの少しだけ太い」

以上の実例に使用された比較三級の形態音韻変化現象を持つ接尾辞は、可変短母音音素/a/, /ə/, /o/, /θ/と不変子音音素/h/, /ŋ/の組合せで構成される。

エヴェンキ語において、二つの母音音素と三つの子音音素が組み合わされた形態音韻変化の接尾辞は9つある。また、これらはCVCVC, CCVCVの音韻構造形式を持つが、CVCVCの形式で構成された実例は8つ、CCVCVは一つしかない。また、動詞の直説法に関する接尾辞は5つ、名詞類の格形態、人称形態、級形態及び副動詞形態のカテゴリーには一つずつしかない。勿論、この項目において、動詞形態における直説法の形態音韻変化現象を持つ接尾辞は、かなり大きな役割を果たしている。

また、この項目に属する接尾辞はすべて可変短母音音素/a/, /ə/または/u/, /ɯ/或いは/a/, /ə/, /o/, /θ/と長母音音素/aa/, /əə/, /oo/, /θθ/の音韻変化現象を中心にして構成される。この問題を更に具体的に分析すると、短母音/a/, /ə/, /o/, /θ/の音韻変化で構成される実例は4つ、短母音/a/, /ə/及び/u/, /ɯ/の音韻変化を持つ実例はそれぞれ3つある。しかし、長母音/aa/, /əə/, /oo/, /θθ/の音韻変化を基準に構成された形態音韻変化の接尾辞は、ただ一つである。また、短母音/a/, /ə/, /o/, /θ/及び長母音/aa/, /əə/, /oo/, /θθ/の形態音韻変化現象は、基本的に接尾辞の前置する音節に、短母音/a/, /ə/及び/u/, /ɯ/の場合はすべて接尾辞の後置する音節に現れる等の規則が存在する。なお、これらの可変的な母音音素は殆どすべて不変的な子音音素/ŋ/, /h/, /dʒ/, /m/, /r/, /l/, /ʃ/, /ŋ/, /t/, /w/及び中性短母音/i/と組み合わされて形態音韻変化の接尾辞を構成する。

(七)、二つの母音音素と四つの子音音素の組合せ

エヴェンキ語において、二つの母音音素と四つの子音音素で組合せられて構成される接尾辞は、主として動詞の直説法形態、仮定法形態、願望法形態、命令法形態、副動詞形態及び名詞類の級形態のカテゴリーの中で使用される。また、この項目に属する接尾辞は、すべてCVCCVCあるいはCCVCVCの音韻構造形式を持つ。この項目に含まれる実例は合わせて7つある。

(1) 音韻構造形式がCVCCVCの接尾辞は、次の3つの場合に具体的に分けることができる。

A 動詞の直説法形態における複数二人称の現在形の接尾辞/
dʒitʃtʃuŋ/, /dʒitʃtʃuŋ/

例えば、ana-「押す」 + -dʒitʃtʃuŋ ⇒ anadʒitʃtʃuŋ「(あなたたちは) 押している」

əwə-「下りる」+ -dʒitʃtʃuŋ ⇒ əwədʒitʃtʃuŋ「(あなたたちは) 下りている」

これらの形態音韻変化の接尾辞は、単母音音素/u/, /ʊ/の形態音韻変化現象を中心に子音音素/dʒ/, /tʃ/, /ŋ/及び中性短母音音素/i/が組み合わされて構成される。

B 動詞の命令法形態における複数二人称の/haldʊŋ/, /həldʊŋ/, /holdʊŋ/, /həldʊŋ/

例えば、ana-「押す」 + -haldʊŋ ⇒ anahaldʊŋ「(あなたたちは) 押せ」

əwə-「下りる」+ -həldʊŋ ⇒ əwəhəldʊŋ「(あなたたちは) 下りろ」

ugu-「乗る」 + -holdʊŋ ⇒ uguhaldʊŋ「(あなたたちは) 乗れ」

buu-「与える」+ -həldʊŋ ⇒ buuhəldʊŋ「(あなたたちは) 与えよ」

これらの実例に用いられた命令法形態の形態音韻変化現象は、短母音音

素/a/, /ə/, /o/, /θ/及び/u/, /ʉ/の二重の音韻変化を持ち、子音音素/h/, /l/, /d/, /ŋ/と組み合わせられて構成されている。

C 名詞類の級形態における比較三級の接尾辞/həŋkəŋ/, /həŋkəŋ//
hoŋkoŋ/, /həŋkoŋ/

例えば, aya「好い」 + -həŋkəŋ ⇒ ayahəŋkəŋ「ほんの少し好い」
əru「悪い」 + -həŋkəŋ ⇒ əruhəŋkəŋ「ほんの少し悪い」
oyo「賢い」 + -hoŋkoŋ ⇒ oyohoŋkoŋ「ほんの少し賢い」
buggu「太い」+ -həŋkoŋ ⇒ bugguhəŋkoŋ「ほんの少し太い」

これらの接尾辞は短母音音素/a/, /ə/, /o/, /θ/の形態音韻変化現象を中心に子音音素/h/, /k/, /ŋ/と組み合わせられて構成される。

(2) エヴェンキ語において、音韻構造形式がCCVCVCの形態音韻変化の接尾辞は次の三つ分野に具体的に分けることができる。

A 動詞の仮定法形態における複数一人称の接尾辞/kkimuŋ/, /kkimʉŋ/及び複数二人称語の接尾辞/kkisəŋ/, /kkisʉŋ/

例えば, /kkimuŋ/, /kkimʉŋ/（複数一人称の接尾辞）

ana「押す」 + -kkimuŋ ⇒ anakkimuŋ「(私達は) 押せば」
əmə「来る」 + -kkimʉŋ ⇒ əməkkimʉŋ「(私達は) 来れば」

この項目に属する仮定法の接尾辞はすべて短母音音素/u/, /ʉ/の形態音韻変化現象を中心に子音音素/m/, /ŋ/と二重子音音素/kk/及び中性短母音音素/i/との組合せで構成されている。

B 動詞の願望法における複数一人称の接尾辞/ktemuŋ/, /ktemʉŋ/

例えば, ana「押す」 + -ktemuŋ ⇒ anaktemuŋ「(私達は) 押したい」

əmə「来る」+ -ktemʉŋ ⇒ əməktemʉŋ「(私達は) 来たい」

願望法形態の複数一人称の接尾辞は、主として短母音音素/u/, /ʉ/の形態音韻変化現象を基準に子音音素/ŋ/, /m/と二重子音音素/kt/および中性

短母音音素/e/との組合せで構成される。

C 副動詞の限度副動詞の接尾辞/tʃtʃohiŋ/, /tʃtʃəhiŋ/

例えば, olo-「驚く」 + -tʃtʃohiŋ ⇒ olotʃtʃohiŋ 「驚くほどに」

əmə-「来る」 + -tʃtʃəhiŋ ⇒ əmətʃtʃəhiŋ 「来るほどに」

限度副動詞の接尾辞は, 短母音音素/o/, /ə/の形態音韻変化現象を中心に子音音素/h/, /ŋ/または二重子音音素/tʃtʃ/と中性短母音音素の/i/の組合せで構成される。

要するに, エヴェンキ語において, 二つの母音音素と三つの子音音素の組合せで構成された接尾辞は CVCCVC, CCVCVC の音韻構造形式を持つが, CVCCVC の音韻構造形式に属する実例は 3 つ, CCVCVC のものは 4 つある。また, これらの接尾辞はすべて可変短母音/o/, /ə/または/u/, /ʉ/および/a/, /ə/, /o/, /ə/の形態音韻変化現象を基準にして構成されるが, 短母音/u/, /ʉ/を中心にした実例は 4 つ, 短母音/a/, /ə/, /o/, /ə/を主としたものは 2 つで, 短母音/o/, /ə/によるものは一つしかない。従って, この項目において, 短母音/u/, /ʉ/の形態音韻変化現象は, 形態音韻論において一番大きな役割を果たしている。また, 短母音/u/, /ʉ/の形態音韻変化現象はすべて接尾辞の後置する音節に現れる。しかし, 短母音/a/, /ə/, /o/, /ə/および/o/, /ə/の形態音韻変化現象は主として前置する音節に出現する。更に, この項目に含まれる実例の 90 パーセントが動詞形態に関する接尾辞であり, 名詞類に関する実例は僅か 10 パーセントである。このことは, 二つの母音音素と三つの子音音素が組み合わされた形態音韻変化では, 動詞形態の音韻変化現象がかなり積極的な役割を發揮していることを実証しているのである。

(八), 三つの母音音素と四つの子音音素の組合せ

エヴェンキ語の形態音韻変化の接尾辞において, 三つの母音音素と四つの子音音素で構成される非常に複雑な音韻構造内容を持つ実例がある。また, この項目に属する接尾辞の音韻構造形式は CVCVCVC 及び CVCCV-CV で, 主として動詞の願望法形態と名詞類の級形態のカテゴリーで使用

される。なお、この項目に属する接尾辞は5つある。

- (1) 音韻構造形式が CVCVCVC の形態音韻変化現象の接尾辞には、級形態における比較三級の接尾辞 /salahaŋ/, /sələhəŋ/, /solohəŋ/, /sələhəŋ/ がある。

例えば, ya「好い」 + -salahaŋ ⇒ ayasahaŋ「ほんの少し好い」
 əwə「悪い」 + -sələhəŋ ⇒ əwəsələhəŋ「ほんの少し悪い」
 oyo「賢い」 + -solohəŋ ⇒ oyosolohəŋ「ほんの少し賢い」
 buŋŋu「太い」 + -sələhəŋ ⇒ buŋŋəsələhəŋ「ほんの少し太い」

これらは、短母音 /a/, /ə/, /o/, /θ/ の形態音韻変化現象を中心に子音 /s/, /l/, /h/, /ŋ/ との組合せで構成された接尾辞である。これ以外に、比較三級の意味内包を標示する形態音韻変化の接尾辞 /halahaŋ/, /hələhəŋ/, /holohəŋ/, /hələhəŋ/ 及び /hayahaŋ/, /həyəhəŋ/, /hoyohəŋ/, /həyəhəŋ/ などがある。

- (2) 音韻構造形式が CVCCVCV になる形態音韻変化の接尾辞には、動詞の願望法形態における複数二人称の接尾辞 /haldəne/, /həldəne/, /holdəne/, /həldəne/ と名詞類の級形態比較三級の接尾辞 /həŋsala/, /həŋsələ/, /həŋsolo/, /həŋsələ/ がある。例えば,

A /haldəne/, /həldəne/, /holdəne/, /həldəne/ (願望法の複数二人称の接尾辞)

ana-「押す」 + -haldəne ⇒ anahaldəne「(あなたたちは) 押して下さい」

əwə-「下りる」 + -həldəne ⇒ əwəhəldəne「(あなたたちは) 下りて下さい」

ugu-「乗る」 + -holdəne ⇒ uguholdəne「(あなたたちは) 乗って下さい」

buu-「与える」 + -həldəne ⇒ buuhəldəne「(あなたたちは) 与えて下さい」

言うまでもなく、これらの願望法形態の接尾辞は、短母音 /a/, /ə/, /o/, /

ə/または/o/, /ə/の形態音韻変化現象を中心に、子音音素の/h/, /l/, /d/, /n/及び中性短母音音素/e/と組み合わせられて構成されている。

B /haŋsala/, /həŋsələ/, /hoŋsolo/, /həŋsələ/ (級形態の比較三級の接尾辞)

aya 「好い」 + -haŋsala ⇒ ayahəŋsala 「ほんの少し好い」

əru 「悪い」 + -həŋsələ ⇒ əruhəŋsələ 「ほんの少し悪い」

oyo 「賢い」 + -hoŋsolo ⇒ oyohoŋsolo 「ほんの少し賢い」

buggu 「太い」 + -həŋsələ ⇒ bugguhəŋsələ 「ほんの少し太い」

これらの例に現れた形態音韻変化の接尾辞は、主として可変的な短母音音素/a/, /ə/, /o/, /ə/の音韻変化を中心に子音音素/s/, /l/, /h/, /ŋ/との組合せで構成されている。

(九), まとめ

1, エヴェンキ語において、形態音韻変化現象を持つ接尾辞の音素の非常に複雑な組合せを、以上で論述したように8つに分類することができる。しかし、各々に属する実例の数や具体的な使用頻度には差がある。それらの差異を更に観察し分析すると、項目3に属する音素の組合せで構成された実例が最も多く、形態音韻変化現象を持つ接尾辞の全体の28パーセントを占める。また、使用頻度もかなり高く、形態音韻論上で相当大きな役割を果たしている。次は、項目6, 項目5, 項目2の接尾辞であり、それぞれの使用頻度も割合高く、一定範囲で形態音韻論における音韻変化の機能を発揮している。使用頻度が三番目に位置するのは項目7, 四番目は項目8である。項目4, 項目1は五番目で使用頻度が極めて低いため、形態音韻変化の面で果たしている機能と作用も非常に限られているのは当然である。

2, これら母音音素の形態音韻変化現象を中心に組み合わせられた接尾辞では、①短母音/a/, /ə/, /o/, /ə/の音韻変化現象を持つ実例が最も多く、形態音韻変化の接尾辞全体の45パーセントを占める。②次に多いのは、短母音/u/, /ʉ/の形態音韻変化を持つ実例で22パーセントを占める。③三番目

は短母音/a/, /ə/, /o/, /θ/, /u/, /ʉ/を主にして構成された接尾辞で12パーセント。④四番目は短母音/a/, /ə/のを中心に構成された接尾辞で9パーセント。⑤しかし、短母音/o/, /θ/または短母音/a/, /ə/, /e/, /o/, /θ/あるいは長母音/uu/, /ʉʉ/と長母音/aa/, /əə/, /oo/, /θθ/等で構成された接尾辞はすべて極めて少数であり、合わせて12パーセントである。また、これらの可変母音音素と組み合わせられて、形態音韻変化の接尾辞を構成している不変子音音素には/b/, /w/, /d/, /t/, /n/, /l/, /r/, /s/, /dʒ/, /tʃ/, /ʃ/, /g/, /k/, /h/, /ŋ/, /y/等と不変中性短母音/i/, /e/があるが、そのうち、不変子音音素/ŋ/, /l/, /s/, /m/, /k/, /h/, /d/, /g/または不変中性短母音音素/i/などの使用頻度が割合に高い。勿論、これらの不変子音音素と中性短母音音素も、形態音韻変化現象を持つ接尾辞の発生や使用及び形態音韻論上における機能の発揮等の面で、一定程度の役割を發揮していることは疑いの余地がない。

3, これら形態音韻変化の接尾辞において、単一音節で構成された実例は53パーセント、2音節で構成されたものは47パーセントを占める。2音節の接尾辞の中では、短母音/a/, /ə/, /o/, /θ/, /u/, /ʉ/または/a/, /ə/, /o/, /θ/あるいは/a/, /ə/, /e/, /o/, /θ/のように割合に複雑な音韻変化現象や、長母音/aa/, /əə/, /oo/, /θθ/あるいは/uu/, /ʉʉ/のように特殊な音韻変化現象は殆どすべて前置する音節に現れる。これに対して、短母音/a/, /ə/, あるいは/u/, /ʉ/のように割合に簡単な形態音韻変化現象はすべて後置する音節に出現するという基本的な規則がある。

4, エヴェンキ語の形態音韻変化現象を持つ接尾辞の中には、動詞形態に関する実例が64パーセント、名詞類に関する実例が36パーセントを占める。動詞の態形態、相形態、直説法形態、願望法形態、仮定法形態、命令法形態、副動詞形態のカテゴリーでは、形態音韻変化の接尾辞の使用頻度が異なっている。そのうち、直説法に関する使用頻度が一番高く、次に高いのは相形態、願望法形態、副動詞形態に関するものであるが、態形態、仮定法形態、命令法形態に関するものは相対的に低い。名詞類の複数形態、格形態、人称形態、級形態のカテゴリーにも形態音韻変化の接尾辞

が存在するが、格形態と級形態に関する実例はかなり多く、使用頻度も割合に高い。しかし、人称形態と複数形態に属する実例はそれ程多くはなく、使用頻度もかなり低い。つまり、エヴェンキ語において、動詞の直説法形態と名詞類の格形態、級形態などにおいて、形態音韻論の音韻変化の形式と内容が非常に大きな役割を發揮しているのである。

形態音韻変化の接尾辞も、形態音韻変化現象を持つ派生接尾辞と同じように、いつも直前に位置する語幹の音韻構造の特徴や性質及び母音調和規則が厳守されて、可変母音音素と主に結び付いているのである。換言すれば、形態音韻変化の接尾辞においても、数多くの母音音素が非常に複雑な形態音韻変化現象を分類する上で極めて重要でかつ基幹的な役割を果たしていることは、形態音韻論における形態音韻変化の派生接尾辞の場合と全く一致している。

以上、主として、エヴェンキ語における形態音韻変化の接尾辞を構成する音韻音素の基本的な性質や種類、数量及び音素間に発生する基本的な組合せの内容や特徴、規則、またこれら形態音韻変化の音素が形態音韻論上で具体的に果たしている機能と作用を8つの項目に纏めて論述した。

二、接尾辞の母音を中心にした形態音韻構造の特徴

エヴェンキ語の形態音韻変化の接尾辞はすべてそれぞれ音韻構造形式を持っている。接尾辞には数多くの非常に複雑な形態音韻変化の音韻構造の形式や特徴がある。この問題を明らかにするため、全体的かつ系統的に観察し分析すると、母音音素の形態音韻変化を基準にして分類した接尾辞の音韻構造形式を以下の12の項目にまとめて論述することができる。

(一)、V

エヴェンキ語において、単一母音音素で構成され、この項目に属する形態音韻変化の接尾辞は極めて少数である。具体的に述べると、名詞類の格形態に含まる非確定対格の/a/, /ə/, /o/, /θ/という形態音韻変化の接尾辞

しかない。これらの形態音韻変化現象を持つ接尾辞は、非確定対格の文法上の意味内包を担い、子音で終止した名詞類の語幹の後に付加されるという特別に設定された条件があり、使用頻度も割合に低い。また、非確定対格の形態音韻変化の接尾辞/a/, /ə/, /o/, /ø/は、主として子音で終止する名詞、あるいは名詞化された代名詞、形容詞、数詞等の語幹の後に使用されて、形態音韻論における音韻変化の機能と役割を果たしている。

(二), CV

この項目に属する形態音韻変化の接尾辞は10ある。例えば、動詞の態形態における被動態の接尾辞/wu/, /wʉ/, 相形態の執行相の接尾辞/na/, /nə/, /no/, /nø/, 直説法形態の過去形の接尾辞/su/, /sʉ/ (単数一人称の接尾辞), /sa/, /sə/, /so/, /sø/ (単数及び複数三人称の接尾辞), 願望法形態の接尾辞/ha/, /hə/, 形動詞過去形の接尾辞/sa/, /sə/, /so/, /sø/及び名詞類の格形態における確定格の接尾辞/ba/, /bə/, /bo/, /bø/, /bu/, /bʉ/, 非確定対格の接尾辞/ya/, /yə/, /yo/, /yø/, /yu/, /yʉ/, 与格の接尾辞/du/, /dʉ/などである。これらの中には、可変短母音音素/a/, /ə/, /o/, /ø/の形態音韻変化による実例は4つ、短母音音素/u/, /ʉ/によるものが3つ、短母音音素/a/, /ə/, /o/, /ø/, /u/, /ʉ/によるものが2つあり、短母音音素/a/, /ə/によるものは実例は一つしかない。すなわち、この項目では、短母音音素/a/, /ə/, /o/, /ø/及び/u/, /ʉ/の形態音韻変化現象が割合に大きな役割を發揮していることになる。また、この項目の接尾辞には、動詞形態に関する形式と内容を持つものが7つ、体言形態に関するものが3つある。勿論、CVの音韻構造形式を持つ形態音韻変化の接尾辞は、動詞形態において割合に積極的な役割を果たしている。

(三), CVC

エヴェンキ語において、CVCの音韻構造形式を持つ形態音韻変化の接尾辞が一番多く、形態音韻論における接尾辞全体の27パーセントを占めている。そのうち、動詞の態形態における使動態の接尾辞/haŋ/, /həŋ/, /hoŋ/, /

həŋ/, 相形態の存続相の接尾辞/taal/, /təəl/, /tool/, /təəl/, 反復相の接尾辞/guun/, /gʉun/, 多次相の接尾辞/mal/, /məl/, /mol/, /məl/, 直説法形態の現在形・未来形の接尾辞/raŋ/, /rəŋ/, /roŋ/, /rəŋ/, /ruŋ/, /rʉŋ/ (単数及び複数一人称接尾辞), 命令法形態の接尾辞/gar/, /gr/, /gor/, /gr/ (単数と複数一人称の接尾辞), 副動詞の目的副動詞の接尾辞/nam/, /nəm/, /nom/, /nəm/及び名詞類の複数形態の接尾辞/sal/, /səl/, /sol/, /səl/, /sul/, /sʉl/と/nar/, /nər/, /nor/, /nər/, 格形態における限定格の接尾辞/haŋ/, /həŋ/, /hoŋ/, /həŋ/, 人称形態の接尾辞/muŋ/, /mʉŋ/ (複数一人称の接尾辞), /suŋ/, /sʉŋ/ (複数一人称の接尾辞), 級形態比較一級の接尾辞/haŋ/, /həŋ/, /hoŋ/, /həŋ/等全部で15の形態音韻変化現象を持つ接尾辞がある。

これら CVC の形態音韻変化の接尾辞で、可変短母音音素/a/, /ə/, /o/, /θ/の音韻変化現象を持つ実例が多く、この分野に属する形態音韻変化現象を持つ接尾辞全体の62パーセントを占め、形態音韻論における音韻変化の機能を最大限に発揮している。これ以外に、可変短母音音素/u/, /ʉ/または/a/, /ə/, /o/, /θ/, /u/, /ʉ/及び可変長母音音素/uu/, /ʉʉ/または/aa/, /əə/, /oo/, /θθ/を中心に構成された形態音韻変化現象を持つ接尾辞は合わせて38パーセントで、使用頻度もかなり低い。なお、これらの接尾辞で動詞形態に関する実例が9つ、体言形態に関するものが6つある。この事実は、CVCの形態音韻変化現象を持つ接尾辞が動詞形態において割合に積極的な役割を發揮していることを示している。

(四), CVCV

項目 CVCV の音韻構造形式を持つ形態音韻変化の接尾辞は9つある。例えば、動詞の相形態進行相の接尾辞/dʒisa/, /dʒisə/, 直説法形態過去形の接尾辞/saʃi/, /səʃi/, /soʃi/, /səʃi/ (単数二人称の接尾辞), 願望法形態の接尾辞/gare/, /gəre/, /gore/, /göre/ (単数一人称の接尾辞), /gane/, /gəne/, /gone/, /gene/ (単数と複数三人称の接尾辞), 副動詞形態の条件副動詞の接尾辞/sala/, /sələ/, /solo/, /sələ/, 名詞類の格形態における位格

の接尾辞/dala/, /dələ/, /dolo/, /dole/, 非確定対格の接尾辞/duli/, /duli/, 級形態の比較二級の接尾辞/sala/, /sələ/, /solo/, /sole/等がある。これらの接尾辞について、可変短母音音素/a/, /ə/, /o/, /e/に関する実例は7つで、78パーセントを占め、形態音韻論の面から見ると、かなり大きな役割を發揮している。しかし、短母音/a/, /ə/及び/u/, /u/に関するものはそれぞれ一つしかない。

つまり、CVCVの音韻構造形式を持つ形態音韻変化の接尾辞は、動詞に関する諸形態に割合に積極的に使用され、また多くは短母音/a/, /ə/, /o/, /e/の形態音韻変化現象により構成されている。

(五), CVCVC

この項目の音韻構造形式を持つ形態音韻変化の接尾辞は9つある。例えば、動詞の直説法現在形の接尾辞/dziraŋ/, /dzireŋ/ (単数及び複数三人称の接尾辞), /dzimuŋ/, /dziməŋ/ (複数一人称の接尾辞), /dzisuŋ/, /dzisəŋ/ (複数二人称の接尾辞), 過去形の接尾辞/samuŋ/, /səməŋ/, /somuŋ/, /səməŋ/ (複数一人称の接尾辞), /sasuŋ/, /səsəŋ/, /sosuŋ/, /səsəŋ/ (複数二人称の接尾辞), 副動詞形態の順次副動詞の/laahiŋ/, /ləəhiŋ/, /loohiŋ/, /ləəhiŋ/及び名詞類の人称形態における再帰人称の接尾辞/niwal/, /niwəl/, 級形態の比較三級の接尾辞/hahaŋ/, /həhəŋ/, /hohəŋ/, /həhəŋ/等がある。これらCVCVCの接尾辞には、短母音音素/a/, /ə/, /o/, /e/の形態音韻変化現象を主にした実例が4つ、短母音/a/, /ə/及び/u/, /u/を中心にしたもの、またはこの母音変化現象によるものがそれぞれ3つある。しかし、長母音音素/aa/, /əə/, /oo/, /uu/の音韻変化を主としたものは一つしかない。また、これら形態音韻変化現象を持つ接尾辞で、動詞に関する諸形態に使用された実例は7つ、名詞類に関するものは2つしかない。言うまでもなく、CVCVCの音韻構造形式を持つ形態音韻変化の接尾辞は、専ら動詞の場合に用いられ、主に短母音/a/, /ə/, /o/, /e/または/a/, /ə/あるいは/u/, /u/の形態音韻変化で構成される。

(六), CVCVCVC

この項目には、名詞類の級形態において/salahaŋ/, /sələhəŋ/, /solohəŋ/, /sələhəŋ/という比較三級の形態音韻変化現象を持つ接尾辞しか出現しない。この実例は、短母音音素/a/, /ə/, /o/, /θ/の形態音韻変化現象を中心に構成されている。従って、CVCVCVCの音韻構造形式は、形態音韻論における音韻変化現象を標示する場合にあまり使用されない。

(七), CVCCVC

この項目に属する形態音韻変化の接尾辞は3つある。例えば、動詞の直説法形態現在形の接尾辞/dʒitʃtʃuŋ/, /dʒitʃtʃuŋ/ (複数二人称の接尾辞)、命令法形態の接尾辞/halduŋ/, /həlduŋ/, /holduŋ/, /həlduŋ/ (複数二人称の接尾辞)、名詞類の級形態における比較三級の接尾辞/haŋkaŋ/, /həŋkəŋ/, /hoŋkoŋ/, /həŋkəŋ/がある。この3つの実例は、主として短母音/u/, /ʌ/及び/a/, /ə/, /o/, /θ/の形態音韻変化現象で構成されている。

(八), CVCCVCV

この項目に属する接尾辞の実例は2つしかない。例えば、動詞の願望法形態の接尾辞/haldone/, /həldəne/, /holdone/, /həldəne/ (複数二人称の接尾辞)と名詞類の級形態における比較三級の接尾辞/haŋsala/, /həŋsələ/, /hoŋsolo/, /həŋsələ/である。この2つの形態音韻変化の接尾辞は、主として短母音音素/a/, /ə/, /o/, /θ/及び/o/, /θ/の形態音韻変化現象で構成されている。

(九), CCV

この項目には副動詞形態における併進副動詞の接尾辞/ddu/, /ddʌ/が唯一つ存在する。また、これは可変短母音音素/u/, /ʌ/の形態音韻変化現象で構成されている。

(十), CCVC

この項目に属する接尾辞は2つだけで、動詞の直説法形態における現在形・未来形の接尾辞/tʃtʃuŋ/, /tʃtʃuŋ/及び名詞類の級形態の最高級の接尾辞/ggaŋ/, /ggəŋ/, /ggoŋ/, /ggoŋ/である。これらの接尾辞は、短母音/u/, /ʊ/または/a/, /ə/, /o/, /ø/の形態音韻変化現象で構成されている。

(十一), CCVCV

この項目に属する接尾辞も一つしかない。すなわち、名詞類の格形態における方向格の接尾辞/thahi/, /thəhi/, /thohi/, /thøhi/である。この接尾辞は短母音/a/, /ə/, /o/, /ø/の形態音韻変化現象で構成されている。

(十二), CCVCVC

この項目に含まる形態音韻変化の接尾辞は4つあり、動詞の願望法形態の接尾辞/haldone/, /həldəne/, /holdone/, /høldəne/ (複数二人称の接尾辞) 及び仮定法形態の接尾辞/kkimuŋ/, /kkimuŋ/ (複数一人称の接尾辞), /kkisuŋ/, /kkisuŋ/ (複数二人称の接尾辞), また副動詞形態における限度副動詞の接尾辞/tʃtʃohiŋ/, /tʃtʃøhiŋ/である。言うまでもなく、これらの接尾辞はすべて短母音/o/, /ø/及び/u/, /ʊ/または/a/, /ə/, /o/, /ø/の形態音韻変化現象を中心に構成されている。また,, これらの接尾辞はすべて動詞に関する形態のカテゴリーに使用されるが, とりわけ, 複数人称の場合に用いられることが多い。

(十三), まとめ

ここで議論した内容を次の3つにまとめることができる。

- 1 エヴェンキ語において, 母音音素の形態音韻変化現象を中心に構成された接尾辞は, それぞれの音韻構造形式を持つが, 以上の論述したように, それらの音韻構造形式をV, CV, CVC, CVCV, CVCVC, CVCVCV, CVCCVC, CVCCVCV, CCV, CCVC, CCVCV, CCVCVCの12の項目にまとめることができる。

- 2 それぞれの項目に含まる形態音韻変化を持つ接尾辞は、すべて使用頻度が違うので、それぞれが果たす役割の度合いも異なる。形態音韻変化現象を持つ接尾辞の使用頻度の高いものから順次並べると(1)項目3, (2)項目4, (3)項目5, (4)項目10と7, (5)項目12と8, (6)項目11と9と6と1である。すなわち、項目3に含まる形態音韻変化の接尾辞の使用頻度が最も高く、項目11, 項目9, 項目6, 項目1などに属する接尾辞の使用頻度が非常に低いということである。
- 3 また、項目1, 項目2, 項目3, 項目4, 項目5, 項目9, 項目10, 項目11の形態音韻構造の形式は、主として格形態, 数形態, 人称形態, 相形態, 態形態等の名詞類や動詞に関連する形態音韻変化の接尾辞によく使用されるが、項目6, 項目7, 項目8, 項目12の形態音韻構造の形式は殆どすべて直接法形態, 願望法形態, 命令法形態, 仮定法形態, 級形態, 副動詞形態等の動詞や名詞類に関する形態音韻変化の接尾辞に使用されるものが圧倒的に多い。また、エヴェンキ語の形態音韻変化の接尾辞において、動詞の諸形態に関する実例は64パーセント、名詞類の諸形態に関するものが36パーセントを占める。この事実は、エヴェンキ語の形態音韻変化の接尾辞が動詞に関する極めて複雑な文法上の意味内包を妥当かつ完璧に標示することにおいて、極めて大きな機能と役割を發揮していることを示しているのである。

三、接尾辞の母音を中心にした形態音韻構造の類型

エヴェンキ語においては、形態音韻論における音韻変化を持つ接尾辞は殆どすべて形態音韻構造の類型に分類することができる。しかし、これらの接尾辞には、形態音韻変化現象を持つ派生接尾辞のように、母音音素の音韻変化現象を中心に構成された音韻構造形式が8つの類型にまで分類できるような実例は発見できなかった。すなわち、エヴェンキ語における接尾辞の形態音韻変化は殆どすべて2類型から6類型までの間に分類される。各類型に属する接尾辞は、具体的な言葉の中で使用される場合、必ず

特別に設定された固定的な音韻構造の類型として現れる。すなわち、名詞類の態形態における被動態形態の接尾辞/*wu/*,/*wu̥/*, 人称形態の再帰人称の複数接尾辞/*niwal/*,/*niwəl/*, 動詞の直説法形態における現在未来形の複数の接尾辞/*dʒiraŋ/*,/*dʒirəŋ/*等は一律に2つの類型に分類され実例である。また、名詞類の格形態における確定対格の接尾辞/*ba/*,/*bə/*,/*bo/*,/*bə/*,/*bu/*,/*bu̥/*, 級形態における比較三級の接尾辞/*salahaŋ/*,/*sələhəŋ/*,/*solohon/*,/*sələhəŋ/*,/*suluhuŋ/*,/*suluhu̥ŋ/*等は6つの類型に分類された実例である。エヴェンキ語における形態音韻変化現象を持つ接尾辞の音韻構造の類型は割合に複雑であるが、以下の4項目に分類することができる。

(一)、形態音韻変化によって2類型に分類される接尾辞

エヴェンキ語において、名詞類の級形態に含まる形態音韻変化の接尾辞を除くと、ほかの諸形態のカテゴリーには、可変短母音音素/*u/*,/*u̥/*と/*a/*,/*ə/*または/*o/*,/*ə/*あるいは可変長母音音素/*uu/*,/*uu̥/*の形態音韻変化現象を基準にして2つ類型に分類される接尾辞がある。これらの接尾辞が具体的な言葉の中で使用される度合は異なるが、エヴェンキ語の非常に複雑な文法上の意味を妥当かつ詳細に表示する上で、積極的な役割を發揮していることは言うまでもないである。

(1) 短母音/*u/*,/*u̥/*及び長母音/*uu/*,/*uu̥/*により2類型に分類される接尾辞

形態音韻変化現象を持つ接尾辞には、可変短母音音素/*u/*,/*u̥/*,あるいは可変長母音音素/*uu/*,/*uu̥/*の音韻変化現象を中心に構成され、これらを基準に分類され、それぞれ使用される実例が少なくない。この形態音韻変化現象を具体的に分析すると、2つの類型に分類される形態音韻変化の接尾辞は、主として動詞の態形態や相形態、直説法形態、願望法形態、仮定法形態、副動詞形態及び名詞類の格形態や人称形態などに使用される。すなわち、この分野に含まれるものとしては、/*tʃtʃuŋ/*,/*tʃtʃu̥ŋ/*(複数形態の接尾辞)；/*du/*,/*du̥/*；/*duli/*,/*duli̥/*(格形態の接尾辞)；/*wu/*,/*wu̥/*(態形態

の接尾辞) ; /guutʃ/, /gʉutʃ/ (相形態の接尾辞) ; /dʒimʉŋ/, /dʒimʉŋ/ ; /dʒitʃʉŋ/, /dʒitʃʉŋ/ ~ /muŋ/, /muŋ/ (直説法形態の接尾辞) ; /ktemʉŋ/, /ktemʉŋ/ (願望法形態の接尾辞) ; /kkimʉŋ/, /kkimʉŋ/ ; /kkisuŋ/, /kkisuŋ/ (假定法形態の接尾辞) ; /ddu/, /ddʉ/ (副動詞形態の接尾辞)等14の接尾辞があり,形態音韻変化現象を持つ接尾辞全体の24パーセントを占める。

これらの接尾辞について,独特でかつ典型的な音韻構造の特徴と文法上の意味を持つ実例を挙げて個別に説明する。

① /tʃʉŋ/, /tʃʉŋ/ (複数形態における二人称の接尾辞)

samaŋ 「知恵者」 + -tʃʉŋ ⇒ samaŋtʃʉŋ 「知恵者達」

dʉŋgʉg 「愚昧の者」 + -tʃʉŋ ⇒ dʉŋgʉgtʃʉŋ 「愚昧の者達」

② /du/, /dʉ/ (格形態における与格の接尾辞)

amihəŋ 「おじさん」 + -du ⇒ amihəŋdu 「おじさんに」

ənihəŋ 「おばさん」 + -dʉ ⇒ ənihəŋdʉ 「おばさんに」

③ /suŋ/, /sʉŋ/ (人称形態における所属単数二人称の接尾辞)

hahara 「鶏」 + -suŋ ⇒ haharasuŋ 「あなた達の鶏」

ʉhʉr 「牛」 + -sʉŋ ⇒ ʉhʉrsʉŋ 「あなた達の牛」

④ /wu/, /wʉ/ (態形態における受動態の接尾辞)

dʒoono-「思う」 + -wu ⇒ dʒoonowu-「思われる」

təɾə-「勝つ」 + -wʉ ⇒ təɾəwʉ-「負ける」

⑤ /guutʃ/, /gʉutʃ/ (相形態における反復相の接尾辞)

dʒawa-「つかむ」 + -guutʃ ⇒ dʒawaguutʃ 「反復してつかむ」

iʃi-「見る」 + -gʉutʃ ⇒ iʃigʉutʃ 「反復して見る」

⑥ /su/, /sʉ/ (直説法形態における単数一人称過去形の接尾辞)

dʒoono-「思い出す」 + -su ⇒ dʒoonosu 「私は思い出した」

ʉli-「行く」 + -sʉ ⇒ ʉlisʉ 「私は行った」

⑦ /ktemʉŋ/, /ktemʉŋ/ (願望法形態における複数一人称の接尾辞)

dʒoono-「思い出す」 + -ktemʉŋ ⇒ dʒoonoktemʉŋ 「私達が思い出したい」

ʌli-「行く」 + -ktemuŋ ⇒ ʌliktemuŋ 「私達が行きたい」

⑧/kkisʊŋ/, /kkisʊŋ/ (仮定法形態における複数二人称の接尾辞)

dʒoono-「思い出す」 + -kkisʊŋ ⇒ dʒoonokkisʊŋ 「もしあなた達が思い出せば」

ʌli-「行く」 + -kkisʊŋ ⇒ ʌlikkisʊŋ 「もしあなた達が行けば」

以上の実例から、/tʃʊŋ/, /du/, /suŋ/, /wu/, /guutʃ/, /su/, /ktemuŋ/, /kkisʊŋ/等の短母音/u/と長母音/uu/を中心に構成される形態音韻変化の接尾辞は殆どすべて、男性短母音/a/, /o/, /u/及び男性長母音/aa/, /oo/, /uu/等を主にして組み合わされた語幹の後に、/tʃʊŋ/, /dʌ/, /suŋ/, /wʌ/, /guutʃ/, /sʌ/, /ktemuŋ/, /kkisʊŋ/等の短母音/ʌ/と長母音/ʌʌ/を主にして構成される形態音韻変化の接尾辞は、女性短母音/ə/, /θ/, /ʌ/及び女性長母音/əə/, /θθ/, /ʌʌ/等を中心に組み合わされた語幹の後に付加される。また、短母音/u/と/ʌ/, あるいは長母音/uu/と/ʌʌ/に基づいて2つの類型に分類される形態音韻変化現象を持つ接尾辞は、CVC, CV, CCVCVCの音韻構造形式を持つものが圧倒的に多いが、CCV, CCVC, CVCV, CVCVC, CVCCVC等の音韻構造形式を持つものは割合に少ない。勿論、ここで挙げた実例は、長母音/uu/, /ʌʌ/を基準にして分類された反復相の形態音韻変化現象の接尾辞/guutʃ/, /guutʃ/を除いて、全部短母音/u/, /ʌ/の形態音韻変化現象を中心にして、2つの類型に分類されている。

また、短母音/u/, /ʌ/及び長母音/uu/, /ʌʌ/の形態音韻変化現象を中心に構成された接尾辞の絶対多数は、動詞の諸形態において広範に用いられ、形態音韻論における音韻変化の機能をかなり理想的に発揮している。と言うのは、動詞の諸形態に関する実例が73パーセント、名詞類の諸形態に関するものが27パーセントを占めているからである。名詞類については、主として格形態と人称形態の場合に使用される。

(2) 短母音/a/, /ə/により2類型に分類される接尾辞

形態音韻変化の接尾辞において、短母音/a/, /ə/を主にして構成され、またこれを基準にして、2つの類型に分類される接尾辞がある。この分野に

属する形態音韻変化の接尾辞はそれほど多くはないが、主として動詞の相形態、直説法形態、願望法形態、仮定法形態、副動詞形態及び名詞類の複数形態、人称形態等に用いられる。具体的に挙げると、/dʒisa/, /dʒisə/ (相形態の接尾辞), /dʒiraŋ/, /dʒirəŋ/ (直説法形態の接尾辞), /ha/, /hə/ (願望法形態の接尾辞), /niwal/, /niwəl/ (人称形態の接尾辞), /tat/, /tət/ (複数形態の接尾辞) 等、6つである。例えば、

① /tat/, /tət/ (複数形態における接尾辞)

dular 「ドラル氏の人」 + -tat ⇒ dulartat 「ドラル氏の人びと」

ɯli 「ウリ氏の人」 + -tət ⇒ ɯlitət 「ウリ氏の人びと」

② /niwal/, /niwəl/ (人称形態における再帰複数人称の接尾辞)

ahij 「兄」 + -niwal ⇒ ahijniwal 「自分達の兄」

əhij 「姉」 + -niwəl ⇒ əhijniwəl 「自分達の姉」

③ /dʒisa/, /dʒisə/ (相形態における進行相の接尾辞)

dʒoono-「思う」 + -dʒisa ⇒ dʒoonodʒisa 「思い続ける」

ɯli-「行く」 + -dʒisə ⇒ ɯlidʒisə 「行き続ける」

④ /dʒiraŋ/, /dʒirəŋ/ (直説法形態における単数と複数三人称の現在形の接尾辞)

ga-「取る」 + -dʒiraŋ ⇒ gadʒiraŋ 「(彼またはかれらは今) 取っている」

ii-「行く」 + -dʒirəŋ ⇒ iidʒirəŋ 「(彼またはかれらは今) 行っている」

⑤ /ha/, /hə/ (願望法形態における単数二人称の接尾辞)

ga-「取る」 + -ha ⇒ gaha 「取ってください」

ii-「入る」 + -hə ⇒ iihə 「入ってください」

これらの実例から、短母音/a/, /ə/を中心に構成され、またこれを基準に2つの類型に分類される形態音韻変化の接尾辞には、動詞の諸形態に現れたものが4つ、名詞類の諸形態に用いられたものが2つあることが分かる。短母音/a/, /ə/の形態音韻変化現象を基準にして分類された2つの類型は名詞類の諸形態より動詞にかなり積極的に使用され、形態音韻論において

音韻変化の作用を大きく果たしていることが明確に認識される。また、これらの接尾辞はすべて CVCVC, CVCV, CVC, CV の音韻構造形式を持つが、CVCVC と CVCV に属する接尾辞が割合多い。

(3) 短母音/o/, /ə/により2類型に分類される形態音韻変化の接尾辞

可変短母音音素/o/, /ə/の形態音韻変化現象を中心にして構成される接尾辞があるが、実際に存在しているのは、副動詞形態における限度副動詞の/tʃtʃohiŋ/, /tʃtʃəhiŋ/という接尾辞である。

例えば, soŋo-「泣く」 + -tʃtʃohiŋ ⇒ soŋotʃtʃohiŋ 「泣くまで」

mənʉ-「腐る」 + -tʃtʃəhiŋ ⇒ mənʉtʃtʃəhiŋ 「腐るまで」

言うまでもなく、短母音音素/o/, /ə/の形態音韻変化現象を基準にして構成された接尾辞はかなり少ないために、形態音韻論において音韻変化の機能を果たすのも非常に限られている。

また、短母音音素/o/, /ə/の形態音韻変化現象が他の中心となる母音音素と一緒に一つの接尾辞の中に使用され、附属的な役割を果たしている実例が存在する。例えば、願望法形態における複数二人称の接尾辞/haldone/, /həldəne/, /holdone/, /həldəne/では、可変短母音音素/a/, /ə/, /o/, /ə/の形態音韻変化現象が中心で、これを基準にこの接尾辞が4つの類型に分類されるが、短母音音素/o/, /ə/の形態音韻変化現象は、ただ附属的に用いられている。これらの実例は二つしかない。

また、可変短母音音素/u/, /ʉ/と/a/, /ə/または/o/, /ə/あるいは可変長母音音素/uu/, /ʉʉ/の音韻変化現象を中心にして2つの類型に分類される形態音韻変化の接尾辞は、基本的に CV, CVC, CVCV, CVCVC, CVC-CVC, CVCCVCV, CCV, CCVC, CCVCVC の9つの音韻構造形式を持つ。とりわけ、CVC, CVCV, CV, CCVCVC の4つの音韻構造形式で構成された実例が割合に多い。また、この分野に含まれる接尾辞の中には、短母音/u/, /a/, /o/または長母音/uu/の音韻変化現象を基準にして分類され、主として短母音/a/, /o/, /u/及び長母音/aa/, /oo/, /uu/で構成された語幹の後や、短母音/ə/, /ə/, /ʉ/または長母音/ʉʉ/の音韻変化現象を基準に

して分類され、主に短母音/ə/, /o/, /ɯ/及び長母音/əə/, /oo/, /uu/で構成された語幹の後に付加されるものがある。また、これらの2類型に分類された実例としては、基本的に名詞類の複数形態、格形態、人称形態及び動詞の態形態、相形態、直説法形態、願望法形態、仮定法形態、副動詞形態のカテゴリーに用いられるものが多く、形態音韻論における音韻変化の作用と機能をかなり積極的に果たしている。とりわけ、動詞の直説法形態に使用される接尾辞が顕著な役割を發揮する。更に、これらの接尾辞には、短母音/u/, /ɯ/の形態音韻変化現象を基準にして構成された実例が非常に多く、70パーセント、次に多いのは短母音/a/, /ə/の形態音韻変化を中心にして分類された実例で26パーセントを占める。しかし、短母音/o/, /o/あるいは長母音/uu/, /uu/を中心に分類された実例は、それぞれ僅か2パーセントで、形態音韻変化の機能を發揮する程度も極めて低い。

(二)、音韻形態変化によって四類型に分類される接尾辞

形態音韻変化現象を持つ接尾辞について、形態音韻論の音韻構造の基本的な規則及び根本的な原理に従い、形態音韻変化の方法や手段を精細かつ巧妙に利用して分析すると、可変短母音音素/a/, /ə/, /o/, /o/あるいは可変長母音音素/aa/, /əə/, /oo/, /oo/の音韻変化現象を中心に構成され、またこれを基準に4つの類型に分類される接尾辞が最も多く、形態音韻変化の接尾辞全体の48パーセントを占める。そして、この類型に含まれる実例は、名詞類の複数形態、人称形態、級形態及び動詞の態形態、相形態、直説法形態、願望法形態、命令法形態、副動詞形態の場面に現れ、非常に広範に使用されている。すなわち、この分野には/nar/, /nər/, /nor/, /nər/ (複数形態の接尾辞), /la/, /lə/, /lo/, /lə/, /dala/, /dələ/, /dolo/, /dələ/ ; /thahi/, /thəhi/, /thohi/, /thəhi/ (格形態の接尾辞), /haŋ/, /həŋ/, /hoŋ/ ~ /sala/, /sələ/, /solo/, /sələ/ ; /hahaŋ/, /həhəŋ/, /hohəŋ/, /həhəŋ/ ~ /haŋkaŋ/, /həŋkəŋ/, /hoŋkoŋ/, /həŋkəŋ/ ; /ggaŋ/, /ggaŋ/, /ggoŋ/, /ggoŋ/ (級形態の接尾辞), /haŋ/, /həŋ/, /hoŋ/, /həŋ/ (態形態の接尾辞), /na/, /nə/, /no/, /nə/ ; /taal/, /təəl/, /tool/, /təəl/, /

mal/, /məl/, /mol/, /mөл/, /taŋ/, /təŋ/, /toŋ/, /tөŋ/ (相形態の接尾辞), /raŋ/, /rəŋ/, /roŋ/, /rөŋ/ ; /dʒiraŋ/, /dʒirəŋ/, /dʒiroŋ/, /dʒirөŋ/ ; /sa/, /sə/, /so/, /sө/ ; /saʃi/, /səʃi/, /soʃi/, /sөʃi/ ; /samuŋ/, /səmʉŋ/, /somuŋ/, /sөmʉŋ/ (直説法形態の接尾辞), /gare/, /gərə/, /gore/, /gөre/ ; /gane/, /gəne/, /gone/, /gөne/ ~ /gatmuŋ/, /gətmʉŋ/, /gotmuŋ/, /gөtmʉŋ/ ; /haldone/, /həldөne/, /holdone/, /hөldөne/ (願望法形態の接尾辞), /gar/, /gər/, /gor/, /gөр/ ; /haldөŋ/, /həldөŋ/, /holdөŋ/, /hөldөŋ/ (命令法形態の接尾辞), /natʃtʃi/, /nəʃtʃi/, /notʃtʃi/, /nөʃtʃi/ ; /laahiŋ/, /ləhiŋ/, /loohiŋ/, /lөhiŋ/ (副動詞形態の接尾辞), /sa/, /sə/, /so/, /sө/ (形動詞形態の接尾辞)等合わせて34の接尾辞がある。短母音/a/, /ə/, /o/, /ө/, あるいは長母音/aa/, /əə/, /oo/, /өө/の形態音韻変化現象を持つ接尾辞の構造は、非常に豊かかつ複雑である。その実例の中から、形態音韻変化と音韻構造の形式及び文法上の意味等の面で、比較的顕著な特徴を持つ典型的な実例を選び出して、4つの類型に分類される形態音韻変化現象を具体的に記述する。

①/nar/, /nər/, /nor/, /nөр/ (複数形態における接尾辞)

ahiŋ 「兄」 + -nar ⇒ ahiŋnar 「兄達」

əhiŋ 「姉」 + -nər ⇒ əhiŋnər 「姉達」

ooʃe 「義兄」 + -nor ⇒ ooʃenor 「義兄達」

ʉt 「子供」 + -nөр ⇒ ʉtnөр 「子供達」

②/la/, /lə/, /lo/, /lө/ (格形態における位格の接尾辞)

bira 「川」 + -la ⇒ birala 「川に」

əggidə 「下」 + -lə ⇒ əggidələ 「下に」

bog 「地面」 + -lo ⇒ boglo 「地面に」

dʒʉʉ 「屋」 + -lө ⇒ dʒʉʉlө 「屋に」

③/hahaŋ/, /həhəŋ/, /hohöŋ/, /hөhөŋ/ (級形態における比較三級の接尾辞)

aya 「好い」 + -hahaŋ ⇒ ayahahaŋ 「ほんの少しだけ好い」

əru 「悪い」 + -həhəŋ ⇒ əruhəhəŋ 「ほんの少しだけ悪い」

goro「遠い」 + -hohoŋ ⇒ gorohohoŋ「ほんの少しだけ高い」

həhə「青い」 + -həhəŋ ⇒ həhəhəhəŋ「ほんの少しだけ青い」

④/haŋ/, /həŋ/, /hoŋ/, /həŋ/ (態形態における使動態の接尾辞)

adda「喜ぶ」 + -haŋ ⇒ addahaŋ「喜ばせる」

gələə「探す」 + -həŋ ⇒ gələəhəŋ「探させる」

olo「驚く」 + -hoŋ ⇒ olohoŋ「驚かせる」

ələəhəŋi「騙す」 + -həŋ ⇒ ələəhəŋihəŋ「騙させる」

⑤/mal/, /məl/, /mol/, /mөл/ (相形態における多回相の接尾辞)

adda「喜ぶ」 + -mal ⇒ addamal「何度も喜ぶ」

gələə「探す」 + -məl ⇒ gələəməl「何度も探す」

olo「驚く」 + -mol ⇒ olomol「何度も驚く」

ələəhəŋi「騙す」 + -mөл ⇒ ələəhəŋimөл「何度も騙す」

⑥/raŋ/, /rəŋ/, /roŋ/, /rөŋ/ (直説法形態における単数及び複数三人称の現在形・未来形の接尾辞)

adda「喜ぶ」 + -raŋ ⇒ addaraŋ「(彼或いは彼達が現在または将来) 喜ぶ」

gələə「探す」 + -rəŋ ⇒ gələərəŋ「(彼或いは彼達が現在または将来) 探す」

soŋo「泣く」 + -roŋ ⇒ soŋoroŋ「(彼或いは彼達が現在または将来) 泣く」

ələəhəŋi「騙す」 + -rөŋ ⇒ ələəhəŋirөŋ「(彼或いは彼達が現在または将来) 騙す」

⑦/gare/, /gəre/, /gore/, /gөre/ (願望法形態における単数一人称の接尾辞)

adda「喜ぶ」 + -gare ⇒ addagare「(私は) 喜びたい」

gələə「探す」 + -gəre ⇒ gələəgəre「(私は) 探したい」

soŋo「泣く」 + -gore ⇒ soŋogore「(私は) 泣きたい」

ələəhəŋi「騙す」 + -gөre ⇒ ələəhəŋigөre「(私は) 騙したい」

⑧/haldəŋ/, /həldəŋ/, /holdəŋ/, /hөldəŋ/ (命令法形態における単数二

人称の接尾辞)

dʒawa-「つかむ」 + -haldəŋ ⇒ dʒawahaldəŋ 「(あなたたちは) 掴め」

gələə-「探す」 + -həldəŋ ⇒ gələəhaldəŋ 「(あなたたちは) 探せ」

soŋo-「やる」 + -holdəŋ ⇒ soŋoholdəŋ 「(あなたたちは) 泣け」

ələəhəʃi-「騙す」 + -həldəŋ ⇒ ələəhəʃihəldəŋ 「(あなたたちは) 騙せ」

⑨/laahiŋ/, /ləəhiŋ/, /loohiŋ/, /ləəhiŋ/ (副動詞形態における緊迫副動詞の接尾辞)

dʒawa-「つかむ」 + -laahiŋ ⇒ dʒawalaahiŋ 「つかむとすぐに」

əwə-「降りる」 + -ləəhiŋ ⇒ əwələəhiŋ 「降りるとすぐに」

oo-「やる」 + -loohiŋ ⇒ ooloohiŋ 「やるとすぐに」

buu-「あげる」 + -ləəhiŋ ⇒ buuləəhiŋ 「あげるとすぐに」

⑩/sa/, /sə/, /so/, /sə/ (形動詞形態における過去形の接尾辞)

dʒawa-「つかむ」 + -sa ⇒ dʒawasa 「つかんだ」

əwə-「降りる」 + -sə ⇒ əwəsə 「降りた」

soŋo-「なく」 + -so ⇒ soŋoso 「泣いた」

ələəhəʃi-「騙す」 + -sə ⇒ ələəhəʃisə 「騙した」

可変短母音音素/a/, /ə/, /o/, /ə/及び可変長母音音素/aa/, /əə/, /oo/, /əə/の形態音韻変化現象を基準にして4つの類型に分類される接尾辞は、実例を挙げて説明した通り、極めて豊富で数もかなり多い。さらに具体的に観察し分析すると、これらの接尾辞は、名詞類の人称形態と動詞の仮定法形態を除く、他の諸形態のカテゴリーですべて使用され、幅広い面で形態音韻論における音韻変化の作用を果たしている。とりわけ、動詞に関する諸形態において、形態音韻論上非常に大きな役割を發揮している。すなわち、動詞関係の実例は、4類型に分類された接尾辞全体の58パーセント、また、動詞に関する形態音韻変化現象を持つ接尾辞全体の61パーセントを占めている。実際に、この項目に含まれる接尾辞の中には、動詞の直説法形態に属する実例が7つ、願望法形態の実例が5つ、副動詞形態の実例が4

つ、相形態の実例が4つ、命令法形態の実例が2つ、態形態と形動詞形態の実例がそれぞれ1つ、合わせて24の実例がある。また、4つの類型に分類された形態音韻変化の接尾辞で名詞類の級形態と格形態及び複数形態に関連する実例が40パーセントを占め、形態音韻変化現象の作用を特定の形態のカテゴリーにおいてかなり大きな役割を果たしている。すなわち、名詞類の級形態における6つの接尾辞はすべて4類型の実例であるため、級形態カテゴリーにおいて形態音韻変化の機能を最大限に発揮している。それから、4つの類型に分類された形態音韻変化の接尾辞で名詞類の格形態の実例が3つあり、格形態の場合でも、形態音韻論の面から見て、重要な役割を果たしている。なお、複数形態に関する実例は一つである。

4つの類型に分類された形態音韻変化の接尾辞は殆どすべてCV, CVC, CVCV, CVCVC, CVCVCVC, CCVC, CCVCV, CVCCVC, CVCCVCVの9つの音韻構造形式を持つ。そのうちCVCとCVCVの実例が非常に多い。次に多いのは、CV, CVCVC, CVCCVC, CVCCVCVである。CCVC, CCVCV, CVCCVCVの音韻構造形式を持つ接尾辞は使用頻度がかなり低い。

また、これらの接尾辞はすべて可変短母音尾音素/a/, /ə/, /o/, /θ/及び可変長母音音素/aa/, /æ/, /oo/, /œ/の音韻変化を中心に構成されるが、そのうち、短母音/a/, /ə/, /o/, /θ/の形態音韻変化現象を基準にして分類された接尾辞は95パーセントを占め、接尾辞を構成する根幹的な条件と理由になっている。一方、長母音/aa/, /æ/, /oo/, /œ/の音韻変化現象を基準にして構成されたものは5パーセントしかない。

(三) 形態音韻変化によって六類型に分類される派生接尾辞

形態音韻変化の接尾辞には、可変短母音音素/a/, /ə/, /o/, /θ/, /u/, /ʊ/の形態音韻変化現象を基準にして6つの類型に分類される音韻構造の形式と内容を持つ実例がある。形態音韻論の音韻変化と音韻構造の一般的原理及び音素間の接触関係や音素の組合せに関する規則などをもとに、6つの類型に分類される形態音韻変化の接尾辞を客観的に分析すると、これらの

接尾辞は音素の組合せに関する伝統的な規則、とりわけ母音音素の調和規律を厳守しているために、かなり豊かでかつ完璧な音韻変化のシステムを構成している。すなわち、6つの類型に分類する形態音韻変化の接尾辞は、前置する語幹の音韻構造の性質や特徴及び母音調和規律を厳密に守りながら、可変短母音音素/a/, /ə/, /o/, /ø/, /u/, /ʉ/の形態音韻変化の現象を中心に、これらを基準に6つの類型に分類される音韻構造の形式と内容を持っている。しかし、この項目に属する形態音韻変化の現象を持つ接尾辞はかなり少ない。すなわち、6つの類型に含まれる接尾辞は、/sal/, /səl/, /sol/, /səl/, /sul/, /sʉl/ (複数形態の接尾辞) /a/, /ə/, /o/, /ø/, /u/, /ʉ/ ; /ba/, /bə/, /bo/, /bø/, /bu/, /bʉ/ (格形態の接尾辞) の3つである。勿論、この3つの接尾辞は、すべて名詞類関係の形態音韻変化現象である。

次に、実例を挙げて、これらの接尾辞について具体的に記述する。

①/sal/, /səl/, /sol/, /səl/, /sul/, /sʉl/ (複数形態における接尾辞)

amihəŋ 「おじさん」 + -sal ⇒ amihəŋsal 「おじさん達」

ənihəŋ 「おばさん」 + -səl ⇒ ənihəŋsəl 「おばさん達」

omotto 「玉」 + -sol ⇒ omottosol 「多い玉」

həөггө 「橋」 + -səl ⇒ həөггөsəl 「多い橋」

unuhəŋ 「指」 + -sul ⇒ unuhəŋsul 「多い指」

ʉnʉгʉŋ 「メス牛」 + -sʉl ⇒ ʉnʉгʉŋsʉl 「多いメス牛」

②/la/, /lə/, /lo/, /lø/, /lu/, /lʉ/ (格形態における確定対格の接尾辞)

amihəŋ 「おじさん」 + -a ⇒ amihəŋla 「おじさん等を」

ənihəŋ 「おばさん」 + -ə ⇒ ənihəŋə 「おばさん等を」

oroŋ 「鹿」 + -o ⇒ oroŋo 「鹿等を」

əөггөŋ 「周り」 + -ø ⇒ əөггөŋø 「周り等を」

unuhəŋ 「指」 + -u ⇒ unuhəŋlu 「指等を」

ʉnʉгʉŋ 「メス牛」 + -ʉ ⇒ ʉnʉгʉŋlʉ 「メス牛等を」

③/a/, /ə/, /o/, /ø/, /u/, /ʉ/ (格形態における非確定対格の接尾辞)

ahij 「兄」 + -a ⇒ ahija 「兄など」

əhij 「姉」 + -ə ⇒ əhijə 「姉など」

oroŋ 「鹿」 + -o ⇒ oroŋo 「鹿など」

əwəŋ 「お菓子」+ -ə ⇒ əwəŋə 「お菓子など」

unuhŋ 「指」 + -u ⇒ unuhŋu 「指など」

ʉnʉŋ 「メス牛」 + -ʉ ⇒ ʉnʉŋʉ 「メス牛など」

これらの実例から、6つの類型に分類される形態音韻変化の接尾辞が、基本的に名詞類の複数形態と格形態のカテゴリーに用いられる特有な音韻変化現象であるということが明確に認識できる。とりわけ、格形態にかなり積極的に使用され、形態音韻論上、割合に重要な役割を果たしている。一方、名詞類の人称形態、級形態及び動詞関係の諸形態には、全く発見できなかった。また、これらの接尾辞は殆どすべてV, CV, CVCの3つ音韻構造形式を持っている。そのうち、CVで構成される接尾辞が相対的に多い。

四、結論

総括して言えば、エヴェンキ語における形態音韻変化の接尾辞は形式と内容が非常に豊かかつ複雑であり、接尾辞全体の56パーセントを占める。これらの接尾辞はすべて具体的な操作を経て、極めて抽象的かつ独特な形態音韻変化の形式と内容を持ち、形態音韻論において音韻変化の機能と役割を発揮している。エヴェンキ語において、接尾辞の形態音韻変化の形式と内容がこれほどに発達し、幅広い場面で使用されているのは、エヴェンキ人が日常用語に関連するとともに煩雑かつ変化の多い文法上の意味をより精確かつ完璧に表現しようと努力した心理活動とも非常に深い関係があると考えられる。

エヴェンキ語の形態音韻変化の接尾辞について議論した内容を以下の5つにまとめることができる。

1, 母音音素の形態音韻変化現象で構成される接尾辞は、すべて音韻要素の組合せで構成され、それぞれ音韻構造を持つ。それらの音素の極めて複雑な組合せの内容と構造は前述の通り、(1)単一母音音素の構造、(2)単一

の母音音素と単一の子音音素の構造，(3)一つの母音音素と二つの子音音素の構造，(4)一つの母音音素と三つの子音音素の構造，(5)二つの母音音素と二つの子音音素の構造，(6)二つの母音音素と三つの子音音素の構造，(7)二つの母音音素と四つの子音音素の構造，(8)三つの母音音素と四つの子音音素の構造，という8項目にまとめて論述することができる。その内，使用頻度が一番高いのは(3)，次に高いのは(2)，(5)，(6)であり，三番目は(7)，四番目は(8)で，最後は(5)である。

2，母音音素の形態音韻変化現象を持つ接尾辞は，(1)V，(2)CV，(3)CVC，(4)CVCV，(5)CVCVC，(6)CVCVCVC，(7)CVCCVC，(8)CVCCVVCV，(9)CCV，(10)CCVC，(11)CCVVCV，(12)CCVCVC 12の音韻構造形式を持つ。その内，使用頻度が一番高いのはCVC，次に高いのはCV，CVCV，CVCVC，三番目はCVCCVC，CCVCVC，四番目はCVCCVVCV，CCVCで，最後はCCV，CCVVCV，CVCVCVCである。つまり，形態音韻変化現象を持つ接尾辞において，二重子音音素を持つか，または組み合わされる音素の数が多き接尾辞の使用頻度がすべて低い。

3，母音音素の形態音韻変化の現象を持つ接尾辞の音韻構造は，この章で全体的にかつ系統的に分析し研究した通り，二種類型，四種類型，六種類型という3つに分類することができる。この3つの類型に分類される形態音韻変化の接尾辞は，殆どすべて可変母音音素の変化原理を基本的な条件として構成される。この3つの異なる形態音韻変化の類型は，基本的に(1)可変短母音音素/u/，/ʉ/または/a/，/ə/あるいは/o/，/ø/及び可変長母音音素/uu/，/ʉʉ/の形態音韻変化現象を基準にして2類型に分類された実例，(2)可変短母音音素/a/，/ə/，/o/，/ø/及び可変長母音音素/aa/，/əə/，/oo/，/øø/の形態音韻変化現象を基準にして4類型に分類された実例，(3)可変短母音音素/a/，/ə/，/o/，/ø/，/u/，/ʉ/の形態音韻変化現象を基準にして6類型に分類された実例がある。そのうち，(2)の実例が一番多く，58パーセント，次に多いのは(1)で37パーセントを占める。一方，(3)は僅か5パーセントに過ぎない。従って，エヴェンキ語において，4つの類型に分類される形態音韻変化の接尾辞が，形態音韻論の音韻変化において，非

常に大きな役割を發揮していることは言うまでもない。

4, エヴェンキ語における形態音韻変化の現象を持つ接尾辞において、可変母音音素の音韻変化を基準にして構成された実例は、名詞類関係の複数形態、格形態、人称形態、級形態及び動詞関係の態形態、相形態、直説法形態、願望法形態、命令法形態、仮定法形態、副動詞形態、形動詞形態のカテゴリーの中に存在する。これらのうち、名詞類における級形態と動詞における直説法形態のカテゴリーで一番多く用いられ、使用頻度が最も高く、幅広い場面で非常に理想的かつ完璧に形態音韻変化の機能と役割を發揮している。次は、名詞類の格形態、複数形態及び動詞の願望法形態、相形態、副動詞形態のカテゴリーに現れる形態音韻変化の接尾辞である。三番目は、動詞の命令法形態、仮定法形態、態形態及び名詞類の複数形態のカテゴリーに現れる実例である。形態音韻変化現象が最も少なく、形態音韻論における音韻変化の作用を果たす機能も極めて低いのは、形動詞形態に用いられる形態音韻変化の接尾辞である。

エヴェンキ語の形態音韻変化の接尾辞が語幹の後に付加される場合、語幹の音韻構造の性質や特徴、とりわけ語幹の母音調和規則によって分類される。

また、形態音韻変化現象を持つ接尾辞は、動詞関係の諸形態カテゴリーに使用された実例が64パーセント、名詞関係の諸形態カテゴリーに用いられた実例は36パーセントを占める。このことは、動詞関係の諸形態カテゴリーにおいて、形態音韻変化現象がかなり積極的な役割に果たしている事実を示している。

5, エヴェンキ語において、母音音素の形態音韻変化現象を中心にした接尾辞は、可変短母音音素と長母音音素の音韻変化現象を基準にして構成される。そのうち、短母音音素の形態音韻変化現象を中心に構成された実例は95パーセント占め、長母音音素の形態音韻変化現象を主として構成された実例は僅か5パーセントに過ぎない。すなわち、エヴェンキ語の母音音素の形態音韻変化現象を中心に構成された接尾辞において、短母音音素の音韻変化現象は形態音韻論の場面から見て非常に大きな機能と作用を果

たしているのである。

参考文献

- 朝克 (1986) 『エヴェンキ語簡誌』 (胡増益と共著), 北京民族出版社
- (1988) 『エヴェンキ族民間説話』 (耐登等共編), 内蒙古文芸出版社
- (1991) 『ソロン語基本例文集』 (津曲敏郎, 風間伸次郎と共著), 北海道大学文学部
- (1991) 『エヴェンキ語基礎語彙集』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- (1993) 『エヴェンキ語と英語基礎語彙集索引』 日本小樽商科大学言語センター
- (1995) 『エヴェンキ語三大方言対照基礎集』 日本小樽商科大学言語センター
- (1997) 『満州ツングース諸語言語比較研究』 北京民族出版社
- (1997) 『エヴェンキ語研究』 北京民族出版社
- (1997) 『中国ツングース諸語対照基礎語彙集』 日本小樽商科大学言語センター
- (2001) 『黒龍江省満州語口語研究』 (趙阿平と共著) 黒龍江省民族出版社
- (2002) 『満州ツングース諸語のテキスト』 日本東北大学
- (1983) 「エヴェンキ語の音声論」 『内蒙古師範大学学報』 第1号 (p 39-54)
- (1985) 「エヴェンキ語各方言の音声関係」 『中央民族学院学報』 第4号 (p 57-60)
- (1985) 「エヴェンキ語各方言の語彙と音声の特徴を論じる」 『蒙古言語文学』 第1号 (p 62-70)
- (1987) 「エヴェンキ語とオロチョン語の音声関係」 『満語研究』 第2号 (p 32-44)
- (1988) 「エヴェンキ語の話の資料及び音声記録」 『民族言語』 第4号 (p 70-79)
- (1988) 「満州語とエヴェンキ語の音声の対応関係」 『中央民族学院学報』 第4号 (p 42-45)
- (1989) 「モンゴル語とエヴェンキ語の共通母音関係について」 『日本アルタイ学会論文』 7月 (p 1-17)
- (1992) 「呼瑪県のオロチョン語の子音構成」 『満語研究』 第1号 (p 61-69)

- (1992) 「呼馬県のオロチョン語の母音構成」『満語研究』第1号(p 61-69)
- (1993) 「日本アイヌ語とモンゴル語の母音関係」『満語研究』第2号
(p 91-100)
- (1993) 「エヴェンキ自治旗の言語文字の使用概要」『中国民族言語概要』
4月 (p 926-929)
- (1993) 「オロチョン自治旗の言語文字の使用概要」『中国民族言語概要』
4月 (p 929-933)
- (1995) 「満州ツングース諸語の子音構造特徴」『満語研究』第1号
(p 31-35)
- (1996) 「ウイльта語の語頭に保存された原始子音系統について」『民族語
文』第1号 (p 61-66)
- (1996) 「満州ツングース諸語の音声規則論」『満語研究』第1号 (p 9-12)
- (1997) 「エヴェンキ語とエヴェンキ語研究」『エヴェンキ研究』第1号
(p 28-30)
- (1998) 「日本アイヌ語とモンゴル語の子音関係」『満語研究』第2号
(p 89-101)
- (1999) 「エヴィンキ族の宗教特徴及び言語資料について」『中国原始宗教
集』第2巻 (p 136-141) 北京民族出版社, 6月
- (1999) 「日本のアイヌ語とツングース諸語の共有語の母音 a と a, ə, o,
i の対応を論ずる」『満語研究』第1号 (p 20-31)
- (2000) 「日本語とエヴェンキ語の共通点について」『黒龍江省エヴェンキ
研究会論文集』大興安嶺新聞社印刷 5月 (p 190-193)
- (2000) 「世界上の満州ツングース諸語分類特徴を論ずる」『世界民族』第
5期 (p 48-52)
- (2000) 「シベ語論」『満語研究』第2号 (p 68-76)
- (2000) 「ロシアのエヴェンキ語, エヴェン語, ネジダール語の研究につい
て」『満語研究』第1号 (p 35-42)
- (2000) 「世界ツングース諸語の研究分野と状態について」『エヴェンキ研
究』第2号 (p 14-19)
- (2000) 「エヴェンキ語の使用範囲と社会効能」『世界言語』(p 126-129)香
港都市大学
- (2001) 「スオミ語とツングース諸語の共有名詞を論ずる」『満語研究』第
1号 (p 24-31)
- (2001) 「エヴェンキ族の文化変遷と言語の関係」『東北大学言語文化論文

- 集』12月 (p 31-69),
(2001) 「世界満州ツングース諸語研究概論」『アルタイ言語学概論』
(p 103-186) 中央民族大学出版社, 10月
(2001) 「二十世紀の中国アルタイ諸語の研究」『満語研究』第2号 (p 1-14)
- 胡增益 (1986) 『オロチェン語簡誌』中国北京民族出版社
金光平 (1980) 『女真言語文字研究』文物出版社
ドルジ編 『エヴェンキ語漢語辞典』内モンゴル文化出版社
韓有峰 (1993) 『オロチェン語漢語対照語彙』北京中央民族大学出版社
塗吉昌 (1999) 『エヴェンキ語漢語対照語彙』黒龍江省民族研究所
- 城田 俊 (1981) 「格動詞の意味」『国語国文』50巻4 京都大学国語国文学会
(1982) 「体言の体系」『国語国文』51巻12 京都大学国語国文学会
(1983) 「文と語構成—二重不定格と複合語」『国語国文』52巻7 京都
大学国語国文学会
(1993・a) 「文法格と副詞格」仁田義雄編 『日本語の格をめぐる』
くろしお出版
(1993・b) 『日本語の音—音声学と音韻論』ひつじ書房
(1998) 『日本語形態論』ひつじ書房
- 影山太郎 (1980) 『日英比較 語彙の構造』松柏社
(1993) 『文法と語形成』ひつじ書房
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』むぎ書房
(1983・a) 「形態論的なカテゴリーについて」『教育国語』72 むぎ書
房
- 奥田靖雄 (1967) 「で格の名詞と動詞のくみあわせ」『日本語文法・連語論』む
ぎ書房
(1985) 『ことばの研究・序説』むぎ書房
- 清瀬義三郎則府 (1971) 「連結子音と連結母音と—日本語動詞無活用論」『国語
学』86
(1989) 『日本語文法新論』桜楓社
- 三上 章 (1953) 『現代語法序説』刀江書院 復刊 くろしお出版
(1963) 『日本語の構文』くろしお出版
- 国広哲弥 (1970) 『意味の諸相』三省堂
(1980) 『意味論の方法』大修館

- (1985) 「認知と言語表現」『言語研究』88
(1989) 『日英比較講座』(第1巻, 音声と形態) 大修館書店
- 寺村秀夫 (1968) 「日本語名詞の下位分類」『日本語教育』12
(1982) 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
(1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 橋本進吉 (1938) 「国語音韻の変遷」『橋本進吉博士著作集』4 岩波書店 1950
(1946) 『国語学概論』岩波書店
(1948) 『国語法体系論』岩波書店
- 久野 暉 (1973) 『日本文法研究』大修館
(1983) 『新日本文法研究』大修館
- 大槻文彦 (1897) 『広日本文典』林平次郎・三木佐助
- 松下大三郎 (1930) 『標準日本口語法』中文館書店 復刊 勉誠社 1977
- 宮田幸一 (1948) 『日本語文法の輪廓』三省堂
- 森重 敏 (1959) 『日本文法通論』風間書房
- 松村明編 (1971) 『日本文法大辞典』明治書院
- 奥津敬一郎 (1974) 『生成日本文法論』大修館書店
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店
- 池上嘉彦 (1975) 『意味論』大修館
- 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語(上・下)』大修館
- 山口佳紀 (1976) 「体言」岩波講座『日本語』6 岩波書店
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』大修館
- 仁田義雄 (1980) 『語彙論的統語論』明治書院
- 北原保雄等 (1981) 『日本文法辞典』有精堂
- 鈴木一彦等 (1982) 『品詞別, 日本文法講座』(名詞, 代名詞) 明治書院
(1982) 『研究資料日本文法』(形容詞, 形容動詞) 明治書院
- 竹林滋・桜井雅人 (1985) 『音韻・形態』大修館書店
- 草薙 裕 (1985) 「文法形式が担う意味」『文法と意味』II 朝倉日本語新講座 4
朝倉書店
- 大野 晋 (1987) 『文法と語彙』岩波書店
- 金水富敏 (1989) 「代名詞と人称」『講座日本語と日本語教育』4 明治書院
- 福田昆之 (1991) 『日本語とツングース語』(改版) 丸井図書出版株式会社
- 森岡健二 (1994) 『日本文法体系論』明治書院
- 宮岡伯人等 (1997) 『環太平洋の言語』(第三号) 京都大学大学院文学研究科
- 池田哲郎 (2000) 『アルタイ語のはなし』大学書林

津曲敏郎 (2001) 『環太平洋の言語』 (第七号) 北海道大学

Givon T. (1986) 'Prototypes: Between Plato and Wittgenstein' "Noun Classes and Categorization" John Benjamins

Kuhn T. (1962) "The Structure of Scientific Revolutions" Univ. of Chiago Press (中山茂訳: 『科学革命の構造』 みすず書房)

McCawley J. D. (1968) The Phonological Component of a Grammar of Japanese. Mouton.

Comrie B. (1981) "language Universals and Linguistic Typology" Cambridge Univ. Press

Kageyama T. (1980) 'Semantic Relations in the Spray Paint Hypallage' "Papers in Japanese Linguistics" 7 Kaitakusha

Jacobsen W. (1982) "Transitivity in the Verbal Systems" Indiana Univ. Linguistic Club

Kiyose G. N. (1995) Japanese Grammar, A New Approach. Kyoto University.